
Call my name

森 彩子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C a l l m y n a m e

【Nコード】

N 8 3 6 7 W

【作者名】

森 彩子

【あらすじ】

腹違いの姉イネスの身代わりとして、成金アイゼン・ラッドに嫁ぐことになったオルガ。その不幸な出自ゆえに、自分の感情を表現するのが苦手なオルガの初めての恋の物語。何かを望むことが許されなかった彼女が願ったこととは――。

Call my name 1

「オルガ、ついに私の結婚相手が決まったようだ」

「イネス様…」

いつものように母上に隠れるようにして私の部屋を訪れたイネスは、両手で抱えていた自分が読み終えた本を私のベッドの脇に置くと、そのままベッドの上に腰を落とした。

「今は私たち二人だけなのだから、いつもの呼び方でいい」

普段から氷のようだと称させるほど、表情を変えないイネスの顔をみたら突然決まった自分の結婚に対しての不満か、不安にか、ほんの少しだけ眉間に皺が寄せられていた。

いつもは音をたてずに座るイネスの、少し乱暴な音をたてた動作にオルガはイネスの隣に座りこんでその顔を覗き込む。心配そうな私の空のように青い瞳を、海のように深い青色の瞳をもったイネスが見つめ返す。互いのほんのひと匙色の違う青い瞳に映るのは、鏡に映ったような私たちの姿。

「……お姉さま、相手はどなたなの？」

膝の上でぐっと力をこめたままのイネスの手をそっと掴んで私は囁く。

「最近よく名前を聞く男だ。アイゼン・ラッドっといったか……」
「まあ」

オルガは口元に手をあてると、驚きの声をあげる。イネスとオルガの生家であるこのアグリット家は、何代か前には国王の王妃を出している名家であり、最近ぱっとでてきた所謂成金、というものは縁遠いものであり、父やあの母がそれを許すなんて……、オルガは我が家の台所事情がそこまで逼迫しているという事実を見せつけられた気がして、まるで我が家を助ける貢物のようにお嫁にだされる姉を涙にぬれた目で見つめる。

「お前が泣いてどうする…」

オルガの頬を涙がつたっているのに気がついたイネスは、オルガの頬に手をあてて宥めるように撫でる。その動作は母上に怒られ、それを見て見ぬふりをする父上に私がひどく傷ついて声を上げずに枕に顔を伏せたままの私の後ろ頭を撫でてくれていた時と変わらずに優しい。

妾腹である自分をこの家でただ一人、無償の愛で守ってくれていた生まれ年の同じ姉が、ここからいなくなる――。

オルガは溢れる涙を止めることができずに、イネスの膝に顔をくっつける。涙がこぼれ落ちて上等なバラの刺繍がされたスカートに私の涙がしみこまれていく。

私の悲しみを吸い取るように、イネスはそっと私の肩に手をかける。

「今からそれでどうする」

私が本当にここからいなくなった時、お前がどうなるか心配でならない、そういつて微かに微笑む姉に、オルガは我が身のさみしさゆえに泣く自分が恥ずかしくなってイネスに頭を下げる。

「ごめんさない、一番つらいのはお姉さまなのに……、私ったら」

オルガは涙でゆがんだ瞳をぎゅっと手の甲でこすると、そのままぱっと顔をあげる。涙の露が消え鮮明になった視界にうつったのは鏡のような姉の姿。

青の瞳に、色素の薄いミルクティー色のとろりとした髪。まるで双子みたいな、実の父や母でさえ時折間違えてしまうほどに似ている私たち。鏡のように互いの顔を見合せていると、オルガの頭にある考えが浮かんだ。

イネスのように才女ではない、劣っている自分が唯一彼女にしてあげられることと言ったら、それは唯一。

両親が幸いにも与えてくれた、この器をささげることなのではないだろうか。

オルガは名案が浮かびました、と極度の緊張ゆえに少々上ずった声で渴いた唇を絞められる。

「私が、お姉さまの代わりになります」

オルガのゆるぎない瞳の強さと、はっきりとした物言いにイネスは圧倒されて、オルガの顔を阿呆みたいに見つめ返す。いつもは理知的な色を失わないイネスの瞳が、まんまるに開いているさまを見つめながら、オルガは更に言葉を続ける。

「お父様や、お母様だって私たちのことを時々見間違えるのだから、他人になんてわかりっこないわ。それにもしばれてしまったとしても、その時にあなたがいなければ、結局は私が代わりにいくしかない。なんといったって、この家に娘はあなたと私しかないのだから」

黙り込んだままのイネスが、ぎゅっと手に力を込める。こわばっているそれを、オルガはそっと上から温めるように握り締める。

「それではお前が…」

イネスの揺れる瞳を見つめながら、オルガは実に幸せそうにほほ笑んだ。

「いいのです。どうせいつかは見知らぬものと結婚させられる身。ほんの少しお姉さまより早かった、ただそれだけのことです」

「私は、お前には、家のことやそういう煩わしいものを無視して、幸せになってほしいと…」

オルガは秘密の子供であった。

いるようだが、どこにも出されない娘。

まるで霧のように、森の深くの屋敷の隅っこに隠された娘を噂するものはいない。社交界からも忘れ去られたままのオルガ。妾の子で浮かばれることのなかったオルガは、幸いなことにそういった家の事情とは程遠い場所で今まで生きていたのだ。

そんなオルガだったら、結婚相手に関して父や母もそこまで関心をもたないだろう、だからこの哀れな妹にはせめて暖かい自分の家庭をもってもらいたい。

そう密かに願っていたイネスは、オルガの提案を受け入れるわけにはいかないと首を横に振る。

「お姉さま…」

「それはできない」

「でも、お姉さまはもっと勉強がしたいとおっしゃっていたではないですか！　いつか帝都オンブルの大学に行くと、あちらの方では女性にも学問の道が開けていると、そう言っていたではないですか？　お嫁にいくために帝都にいくのではないでしょう」

オルガに自分の夢を語られたイネスは苦悶に表情をゆがませる。せつかく自分が忘れようと、忘れなければならないものを突然語り始めたオルガに、イネスはそれこそまさに夢物語だと口をゆがませる。

顔を陰しくしたイネスに、オルガはたたみかけるように言葉を続ける。

「お姉さま、私はいいのです。私のことは気になさらないで」

黙り込んだままの姉に言葉を続ける。

「お姉さまが自分の道を進んでくれるなら、私はそれがとてもうれしい」

オルガの必死な説得は深夜まで続いた。朝焼けがみえてきた頃、ずっと黙りこんだままであったイネスがようやく小さく頷いた。頷いたイネスは、目の前で一緒にベッドに倒れ込むオルガの頬にそつと手を伸ばす。悲痛な色を宿したイネスの瞳を、オルガは幸せな気持ちで見つめる。

いつも優しい姉の役にたつことができたのだ。

似すぎているがゆえに母には嫌われたが、そうやって虐げられてきた時間さえも全てはここに、この人の役に立つためにつながっていたのかと思うと、オルガは劣等感の塊でしかなかった自分のこの器が初めて愛おしいものだと思った。

産まれて初めて見る涙にぬれたイネスの深い海の色をした瞳を見つめながら、オルガは優しい片割れに微笑みかける。これが自分にとっての最上の幸せなのだといわんばかりに。

Call my name 2

ガラガラと音をたてて回る車輪を尻の下に感じながら、オルガはウトウトと瞳を閉じる。

閉じた瞼の裏に映し出されたのは、イネスが居なくなったということが判明した朝。母は気を失い、父はせっかく決まった結婚を前に姿を消してしまった娘に顔を青ざめさせていた。

比較的小となしかったイネスの突然の反抗に、父と母はどうしたらいいかわからない様子だった。親戚の家に行くわけでもなく、突然煙のように姿を消してしまった娘に、母上はそんなに結婚が嫌だったのかと泣きわめいていた。そんな風にとりみだす母親の肩を抱いて宥めている父上が、ドアの隙間から覗いているオルガに気がついた。

父驚いたように瞳を開いてから、オルガの瞳をみて落胆したと同時に何かを閃いた様子で私を部屋に招き入れる。そっくりな姿で突然現れたオルガに、母は声をあげて顔をふせる。今は絶対に見たくないのだといわんばかりの態度にオルガはそっと母から目をそらして、父を静かに見つめる。珍しく真正面からこちらを見つめる父の視線に、オルガは自分の考えは正しかったのだと、静かに父に微笑みかけた。

イネスが準備していた花嫁衣装に袖を通すと、ほんの少し胸元がきつかったが、なんとかならないレベルではなかったのでオルガはほっと胸を撫でおろす。とろりとしたさわり心地の姉の為に作られたドレスを、オルガはそっと指先でたどりながらこれが自分のウェディングドレスなのか、と小さくつぶやいた。

あの日思い出していたオルガの耳に、隣に座っているあちらの家から私を迎えに来た使者であるアネット夫人の柔らかな声が入ってくる。

「イネス様? どうされました、もしかして馬車に酔われましたか

？」

億劫に瞳を開けると、心配そうにこちらを覗き込む彼女の顔があった。オルガは、こちらを心配してくれるアネットに、ううんと首を横に振ると「少し疲れました」と答える。

オルガの言葉に、アネットはうんうんと知った顔で頷く。

「結婚の準備といったら、初めてのことづくしで大変ですものね。花嫁衣装だけではなく、こちらで必要になるドレスや靴、鞆、帽子。新しい生活の為に準備されるものは嬉しいものですが、準備され出来上がってきたそれを見ると、自分もついにお嫁にいくのか、とセンチメンタルな気持ちになりますわよねー」

オルガはお喋りなアネットに、苦笑いしながら頷く。

ドレスの採寸はイネスが済ませてくれたので、オルガはすでに用意されていたものを持ってお嫁にくるだけだった。

「結婚前に、女性は嬉しさと不安で不安定になるものですわ」

結婚前の女性の気持ちを語られ、オルガは「そうなのですか」と言いながらも、自分のこの気持ちはそれだけではないのだと言えないことを胸の内と思う。

「そんなに緊張なさらなくて大丈夫ですよ」

じつと憂いを帯びた瞳で、離れていく故郷を見つめているオルガを労わるようにアネットは優しく微笑む。

「そんなに緊張しているように見えますか？」

アネットは小さな桜貝がついているような指先を、そっと自分の顎元へもっていつてふうつと息をついた。

「結婚ですものね、私も旦那に会うまでは不安で、不安でたまらなかったですね」

遠い昔に想いを馳せるようにいうアネット夫人に、私は「はあ…」と返すことしかできない。

「でも大丈夫ですよ。共に時間を過ごす内に、互いが互いに大切な存在へとなっていくますから」

「つまり慣れろということですね」オルガは心の中でそう返しながら

ら、アネット夫人の親切な言葉に黙って頷くだけで返した。

全てが初めてのこと尽くしで言葉が少なくなっているオルガに、アネット夫人は「わかる、わかる」としたり顔で頷くと、オルガの気持ちををはかってかもう話しかけてくることはしなくなった。

式は明後日で、色々な準備や身体を慣らすために父や母より先にこちらについたオルガは、止まった馬車から静かに地面へと降り立つ。伏し目がちに降り立ったオルガが、地面に足をおろしてドレスを直してから顔をあげるとそこには、大きな白亜の建物が建っていた。

陽に焼け漂白したような建物に、まぶしさを覚えオルガは目を細める。自分がそれまで住んでいた森の奥の陰鬱とした薄暗い館とは違うそれにオルガは圧倒された。

立ち止まったまま館を見つめるオルガの耳に、せき払いが耳にはいる。オルガは上げていた顔をそちらに向けると、そこには暗い金髪に、暗い瞳をした男が立っていた。

目の下にくまを蓄えた男は、オルガに遠慮なく近寄ってくると前で立ち止まる。上から見下ろされて、オルガはどうしたらいいかわからなく、ただ彼を見上げる。

不躰にこちらを見回す男に、オルガはどうしたらいいかわからなくなつて横にいるアネットに助けを求めて顔を動かす。

「ラッド様。そんなにじっと見つめられるから、イネス様が困っていられますわ」

オルガの助けを求める瞳にきがついたのか、それまで黙りこんでいたアネットが仕方ないといった様子で男に話しかける。

（ラッド、では彼が、結婚相手？）

オルガはアネットに向けていた視線を、恐る恐る目の前の男。ラッドに戻す。

ラッドの瞳を見上げると、灰色がかった青い瞳をしていることが

分かった。熱のない瞳に見つめられながら、オルガはまるで猛禽類に狙われた鼠みたいに身体をこわばらせる。

オルガの怯えた様子にようやく気がついたのか、ラッドの視線はようやくオルガから離れる。

「アネット、世話をかけた」

静かな、低い声でアネットをねぎらったラッドは、頭をさげるアネットに鷹揚に頷いてから、再びこちらに視線を戻す。

「イネス、イネス・アグリット。私はアイゼン・ラッドだ」

「……………存じ上げて、おります」

自己紹介を始めたアイゼンを、オルガは静かに見上げた。先ほどとは違い、ほんの少し落ち着いた気分で陰鬱なその顔を見つめていると、何かが気に障ったのかアイゼンはぐっと眉を引き上げた。

オルガが頭上にはてなマークを浮かべながら、彼を見上げているとアイゼンはふっと視線をそらして「長旅で疲れただろう、宿は用意してあるから……休むといい」と言い残して、オルガと入れ替わるようにして馬車に乗り込んで行ってしまった。

残されてしまったオルガは小さくなっていく馬車を見送ることしか出来なかった。宿に入る前に、一応挨拶と言う話だったが、まさか玄関先で、あれだけの会話で終わるなんて。オルガはアイゼンにとっての自分の価値を叩きつけられた気分になって、ほんの少し嫌悪感を抱いたが、黙ったまま瞳を閉じる。嫌なことは瞳を閉じていると過ぎていくものだ。アイゼンが言った通り、確かに初めての長旅で疲れていたので、今はただ休みたいとこわばった足に触れなから思った。

Call my name 3

あの日以来、今日まで彼、アイゼン・ラッドはオルガの前に現れなかった。

仕事が忙しい彼は、結婚式やその後の休暇の為に最近は更に忙しい日々を送っているらしい。アネットや他の使用人が、結婚式当日まで顔を見せないアイゼンをかばうようにして言葉が続ける。

オルガは、大きな鏡の前に立ち、コルセットをきつく結ばれながら、彼女らの歌うような声に耳を傾ける。

オルガはだんだんと息苦しくなっていくのに、めまいを覚えながら前の柱に手をつく。

(ひどい、くまだった…)

数日前にあったきりの旦那様の目の下に色濃く残ったくまを思い出しながら……というか、それしか印象に残っていないオルガは一つ息をついた。

オルガの疲れた様子に、隣に控えていたアネットがめざとく近づいてくる。

「イネス様、どうなされました？」

アネットは出会ってから、ずっと食の細いオルガを心配している様子だった。出された食事にほんの二口程度口をつけて、ナイフを置いてしまうオルガを心配げに見ていた様を思い出す。オルガはアネットの言葉に、静かに首を横に振りながら答える。

緊張ゆえに、食べ物も喉を通らない様子の口数の少ない令嬢を心配げに見つめる彼女らの視線を感じながら、オルガは瞳を閉じた。確かに緊張もある：ような、気もするが大きな原因はイネスが消え、オルガが代わりにお嫁に行くこと決まったあの時。

目の前に立つ母が、久振りに私を真正面から見つめて言ったのだ「婚儀まであまり食べないように」と。

元から食の細かったイネスより、若干ふくよかな体系のオルガに準備したドレスや、身代わりなのではないか、という余計な心配を減らすための言葉だった。オルガは母の言葉に静かに頷いた。あれから、ほんのわずかなスープや野菜くらいしか口にしていなかった。

その上、今日徹底的にしぼられるウェストに、オルガは自分の胸に手をやる。まるで走った後のように激しく動く胸と、その代わりに冷えて行く指先に、オルガの背を冷たい汗が伝っておちた。

目の前の神父が誓いの言葉を言っている。オルガはよく響き、多くの人々の心をうってきたであろう神父の声がひどく遠くから聞こえてくるような感覚に襲われていた。参列者の間を歩んでいる時も、長いウェディングドレスの下の足がぐくぐくと震えていた。オルガは気分の悪さをごまかすように、深く息をした。大きく上下しているオルガの肩に、隣に立つ男の手がかかる。そのとたん、急に周りの声が鮮明にオルガの耳に入ってくる。神父の「誓いのキスを」という言葉が耳に入ってきたと同時に、ベールでふさがれていた視界が開ける。伏し目がちなオルガの頬に、男の硬い手がおおう。大きなそれは、血の気の失せた頬を優しく撫でる。オルガはその手に誘われるようにして、ゆっくりと瞳をあげた。

「……あっ……」

オルガはまだうつすらと残ったくまをみて、この人がアイゼンかとまじまじと間近から顔を見上げる。照れるでもなく、じっと見つめてくるオルガにアイゼンは近づいて唇が今にも触れそうな位置で止まった。目を閉じるわけでもない花嫁に、アイゼンは静かに頬に添えていた手を上へとあげて、周囲にはわからないようにオルガの瞼に手をあてる。反射的に目を閉じざるをえなかったオルガの紅でやけに赤い唇に、アイゼンの思いのほかしっとりとした唇が触れて、すぐに離れた。

とたんにわんわんと鼓膜が震えるほどの拍手が、教会内に溢れる。

オルガはその音に、身体がぐらりと揺れて前へと、アイゼンの胸に額をつけてしまった。

突然バランスを崩してしまい、花婿にもたれかかるようになってしまった花嫁に、拍手をおくっていた人々はざわめくが、オルガを支えるアイゼンの「緊張したのでしょう」という言葉に、ざわめく声は初な花嫁とそれをたくましい腕で支える花婿に優しげな、なまぬるい視線を向けてくる。オルガは、からかうようにこちらの幸福を祈るざわめきに奔流され、もう耐えられないと瞳を閉じてしまった。

「イネス様、イネス様」

誰かが姉の名前を呼んでいる。行儀作法が嫌になってしまった姉が、私の部屋で隠れて本を読んでいるのかしら、オルガは慌てるような家庭教師の声を聞きながら目を開いた。

（なぜ、目を開いたの？）

オルガはくらくらする頭を押さえながら目をはためかせる。ゆっくりと上体をあげようとすると、枕元に付き添っていたアネットがほっとしたように胸をなでおろす姿が見えた。

「イネス様。大丈夫ですか？ 式の途中で、気を失われたんですよ……覚えていますか？」

アネットの言葉に、オルガはまだぼんやりとした頭で、頷き返す。そうか、私は今お姉さまなのだ。

しゃっきりとしない頭を両手で抱えながら呻くと、アネットが水差しから水を注いでこちらに渡してくる。

「あまり食事を召されなかったことと、コルセットの締め付けがよくなかったみたいですわね……」

「……ごめ……んさい」

式の途中で意識を失ってしまったことに、オルガは顔を更に青ざめさせた。持っているガラスのグラスをブルブルと震わせる様子に、

アネットが慌ててオルガの手を握り締めてくる。

「申し訳ありません。まだ体調も戻っていませんのに、わたしっただら……」

オルガは首を横にふりながら、グラスをアネットに渡す。そうして乱れ落ちてきた前髪を手でくしゃりとかきあげる。そうしていたら、トントンとドアをノックする音が部屋に響いた。オルガはその音にはじかれるようにして、顔をあげると自分がいる場所が教会の控室だということがわかった。控えていた次女がドアをあけると、そこには使用人をつれた母の姿があった。

アネットは、母上に頼笑みながら頭を下げるとオルガのすぐ傍を辞す。他の侍女たちと一緒に壁際まで下がってしまったアネットに、母は少しの間二人にしてと頼んだ。

母とオルガ以外いなくなってしまった部屋で、オルガは母の顔をみる事ができずにいた。

母は椅子に座るでもなく、ただ立ったままこちらを見下ろしている。

「お母様……申し訳ありませんでした……」

「………あまりみつともない姿を見せるのではありませんよ」

オルガの震える謝罪に、ようやく口を開いた母はさっさと部屋で出ていってしまった。オルガは自分の身体から一気に力が抜けるのを感じて、再び長椅子に倒れ込んでしまった。

母と入れ違うようにして部屋へ戻ってきたアネットは、オルガの様子に気がつくとそのと近寄って長椅子から落ちた手を拾い上げてくれる。その暖かいぬくもりを、オルガは避けるように自分の腕を持ち上げてしまう。大事なものを守るように、自分の腕をかかえて瞳をぎゅっと閉じるオルガの肩を、アネットの柔らかな手が宥めるように数回撫でた。

Call my name 4

指先で落ちてきた前髪を耳にかける。侍女が櫛で何度も何度もかしてくれた髪はさらさらと夜風にゆれるたびに花のにおい漂わす。オルガは開いた窓から外を見つめる。拡がる庭園の向こうに見える町のあかりを、ぼんやりと見つめると、自分は本当に遠い所へきてしまったのだなということが身にしみる。

月影や手が加えられていない木々に囲まれていた生家とは違い、ちゃんと庭師の手がはいり人工的につくりかえられた庭の木々を見つめていたら、後ろでドアが開いた。

生家のドアとは違い、重苦しい音を立てないドアの向こうからやってきたのはアイゼンだった。オルガは窓辺の椅子から立ち上がると、さりととした絹の寝巻が足元をくすぐる。

静かに立ち上がったオルガをアイゼンは目にとめると、手だけで再び座るようにと合図した。オルガは、わずかにとまどいながらも再び椅子に腰かける。

オルガの前を通って、窓まで近寄ってきたアイゼンは先ほどのオルガと同じく外を見つめる。オルガはどうしたらいいかわからなくて、アイゼンが見ている方向に再び目をやった。

「……何を見ていた？」

「街を見ていました」

オルガの言葉に、アイゼンはふつと微笑む。オルガはその中にこちらを小馬鹿にしたようなものを感じて、静かにアイゼンに目をむける。

暗い色をした灰色がかった青い瞳が、横目でこちらを向いていた。

「君の住んでいる場所は本当に森の奥だったからな…」

そう言ったアイゼンの口が微妙に持ち上がる。オルガはそれを見つめながら「ええ」と頷きながら同意を示した。とたんに、アイゼンの眉が高く持ち上がる。オルガはそれを見つめながら、この人は

なんなのだろうと首をかしげた。

いくら私にも、この人が自分と良好な夫婦関係を築こうとしていないことぐらいわかる。

それぐらいわかりやすい態度に、オルガは首をかしげる。初対面の人間に、しかも夫婦関係を結んだものに、こうまでの態度をしめすなんて。

幸福な結婚など望めない立場にあるということは承知だったが、まさか初夜でこうまで悪い態度をとられるとは思わなかった。

オルガの静かな、揺れることのない瞳を見下ろしながらアイゼンは口をひらく。

「……具合はどうだ」

「あまりよくありません」

そう申したとたんに、オルガの腹が盛大に音をたてる。アイゼンの見開かれた瞳をみて、彼にもこの音が聞こえたのか、とオルガは更に鳴く腹を抑え込むように手で触れる。

二人の間に微妙な空気が流れる。

これが私たちにとっての初夜なのに、甘い空気は一つもない。

オルガはそんな状況に、アイゼンの瞳を静かに見返すことしか出来ない。

盛大になった腹をおさえたまま、夫を静かに見上げ続けるオルガの無言の訴えに気がついたのか、アイゼンは踵を返すと、使用人を呼ぶためのベルを鳴らした。

「どうして食べない？」

目の前に用意された簡単な食事を前に、オルガは黙りこむ。

母のいった言葉とアイゼンの言葉が胸の内ではせめぎ合っては均衡を保つ。

……まだ、イネスの服は少しきつかった。

アイゼンは黙り込んだままの新妻にあきれたように息をつくと、

自分は自分でさっさとワインをあおる。

「気に入らないか」

「いいえ」

「なら食べたらいいだろう」

アイゼンが、目の前に皿を差し出してくる。オルガは自分の腹が再び盛大になるのがわかった。再びなった腹に、アイゼンは呆れた顔でこちらを見てくる。

「アネットから聞いたが、ここ数日ほとんど食事をとっていないそうじゃないか」

「……それは……」

アイゼンのこちらを問い詰めるような声に、オルガは顔を俯かせる。

「……………別に、ちょうどいいと思うがな」

「えっ……」

「ドレスが少しきつかった、そうだな」

アイゼンの言葉に、オルガはのろろと顔をあげる。

ようやく顔をあげたオルガを、アイゼンは鼻で笑う。

「女というものは、本当に困ったものだ。ウエストの細さにやけにこだわりをもってやがる」

アイゼンはそれまでの穏やかな口ぶりではなく、少し荒れた口調でこちらに視線を向けてくる。

「それで倒れて周りに迷惑をかけているというのに、それでも食べないのか？」

「……ウエストの細さを求めているのは男性も一緒ではありませんか、それに病弱ですぐに倒れてしまう女性のほうがいいと、そういうものなのではありませんか？」

青白い顔で見つめながら、オルガがそう言うときアイゼンは再びこちらを小馬鹿にした態度で見つめてくる。

「君は他人の評価を気にするのか？ 驚くな、以前夜会で見かけた時の君はそうは見えなかった」

所詮他の女と一緒に、アイゼンはそう言うところらに興味を失ったようにして視線をそらす。

「ドレスがきついなら全部作りなおせばいい。俺にはそれだけの財力がある。だから、身体にあわない衣装をつけ、飯もろくにとらんようなことはもうやめてもらいたい」

アイゼンはそういうと、そのまま椅子から立ち上がる。オルガは背を向けてドアの方へと向かっていくアイゼンを見つめる。ドアに手をかけたアイゼンが、背をむけたまま「まだ仕事がある」と言い残して去っていく。

一人、二人の寝室に残されたオルガは、しばらくドアを見つめてからゆっくりと更に目を向ける。茹でられたソーセージに切られたバケット。オルガは手でそれを掴むと、一気にそれをほおばった。

Call my name 5

翌朝別々の部屋に寝ていた新婚夫妻に、屋敷の使用人たちは大いに動揺をみせた。

初夜に別々の部屋とは、いったい何があったのかと。

アネットは初めての朝を一人寝で迎えた可哀そうな花嫁を慰める為に盛んに話しかけるが、気のない返事と変わらない表情にがくりと肩をおろしてしまう。

しかし昨日までとは違い食事もちゃんとするようになったことに、それだけにかんじてはうんうんと満足げに頷いた。そしてお昼がくるころには、家にいる使用人に昨夜アイゼンがイネスのために夜食を用意させたという話を聞いたのか、ご機嫌な様子でやってきた。

「きつとイネス様の体調がよくないのを思っただけの行動だったのですわ」

アネットのキラキラとした瞳がいたたまれなくて、オルガはつつと視線をそらすと目の前に置かれた焼き菓子に手を伸ばす。目の前に座っているアネットはうふふと頬笑みながら、紅茶に口をつける。

「今朝は朝からお食事もとっておられるようですし、顔色もだいぶよくなりましたのね。」

夫に自分の一番美しい姿を見せたいという気持ちもわかりますが、ほどほどにしましょうね。それにイネス様はそれほど必死になる必要なんてありませんわ」

アネットの慰めるような声に、オルガはとりあえず頷いておくことにした。素直なオルガに、アネットはうふふとほほ笑むとそっと顔を寄せてきて「今宵はドキドキですわね」と耳元で囁いた。

オルガはアネットのその言葉に、黙ったまま下を向く。

イネスの代わりに嫁ぐ。とあの時は衝動的にいつてしまったが、イネスが本当に消えてしまった後で、あちらの侍女に教えられたこ

とを思い出す。

真正面からつきつけられたそれに、オルガは額に手をあてた。心の準備も何もない。だから正直いって昨日アイゼンが目の前から去っていった時、オルガはほっとした。いきなりの結婚式、そして初夜。初めてづくしのことに、正直いって昨日は疲れていた。疲れている時にさらに精神的にも肉体的にも非常に疲れることを強要されてしまっていたら、きっとオルガはまいってしまっていただろう。

だからと言って、今夜やれ。というのも自分にとっては色々と難しいことがある。

そう思うことは我儘なことなのか。しかし、これまで年頃の男性と話す機会もなかった自分が、いきなり目の前に男を、しかもそれなりに整った男性を差し出されて、これが今日から旦那さんだよ。と言われて、はいそうですか。と受け入れるわけがない。

オルガは無表情の仮面のしたで、実は非常に弱り切っていた。目の前で微笑むアネットや、後ろで励ますようにこちらを見つめる侍女の視線に小さくため息をもらした。

その夜、当たり前だからアイゼンは二人の寝室にやってきた。

オルガは再び窓際の席に座りこんで外を眺めていたので、ガチャリと開いた音に腰をあげて音もなく立ちあがる。アイゼンはそんな私の前を無視して、再び窓枠に手をかける。

「また、外を見ていたのか」

「はい」

「…座れ」

アイゼンはそういうと、自分も椅子に腰をおろした。

迎え合わせで椅子に座り、オルガはアイゼンを、アイゼンはオルガを見つめる。見つめあう視線に含まれているのは甘さではなく、お互いを値踏みするような、窺うようなものだった。

「……何か好きなものはあるのか」

「好きなもの……ですか？」

「ああ」

アイゼンの言葉に、オルガは首をかしげる。首を傾げたまま、ぼんやりと宙を見たまま黙り込んでしまったオルガを、アイゼンは辛抱強くまつた。

「……好きなもの……ですか……林檎が、好きですね」

アイゼンは、首を横にふった。

「……趣味は？」

「趣味……ですか……」

今度は窓の外に目を向けながら考えはじめたオルガに、アイゼンは少しイライラした様子で先に口を開いた。

「読書が趣味だと聞いているが」

「……趣味、といいますか、それ以外することがなかったの……家の図書室にこもるのが日課でしたわ」

ぼんやりとしたまま、アイゼンの質問に答える。目の前のアイゼンが、オルガの言葉に疲れたといわんばかりに額に手をあてた。

「君はもつと、賢い女性だと思っていた」

それはお姉さまのことですね。オルガは自分一人で納得しながら頷いた。

頷いたオルガに、アイゼンは眉間にしわをよせる。

「こうしてみると——お前は、冷静というより、ボーっとしていると
いう方が相應しい」

「よく言われます」

再びしっかりと頷きながらオルガが答えると、アイゼンは少し前に乗り出していた身体を椅子の背もたれに預けた。

アイゼンは背もたれに背中を預けながら、半分閉じられた瞳でこちらをみってくる。

「君は……阿呆なのか」

「……阿呆、と言われたのは初めてですね。死体みたいに何も語ら

ないとは言われますが」

新妻を新婚生活二日目の夜に「阿呆」呼ばわりしたのは、アイゼンが初めてなのではないだろうか。母以外の、他人に産まれて初めて言われた悪口に、オルガはわずかに目を見張る。自分の周りにいた人間は、私を触れてはいけないもののようにして扱った。好意でも悪意でもなく、ほとんど無視され続けていたオルガにとって、アイゼンのはっきりとした物言いは衝撃的だった。

オルガは、自分が悲しんでいるのか、怒っているのかわからないまま、目の前の男を見つめ続けた。

「屍みたいは何も語らない、とは」

アイゼンは何が楽しかったのか、オルガの言葉を真似しながら喉に何かが引っかかっているように笑い始める。

「誰に言われたんだ？」

「母にです」

オルガは椅子から立ちあがると、寝台の脇の小さなテーブルの上に置かれた水差しに手をかける。そしてそれをグラスの上で傾けると、そのままアイゼンの前に差し出す。

オルガの一言に難しい顔をして黙りこんでいたアイゼンは、なんだこれはという顔でこちらを見上げてくる。

「笑い方が変なので」

オルガの言葉に、アイゼンはグラスに瞳を下ろしてから、再びゆっくりとオルガに視線を向けてくる。

「怒っているのか」

「――何故」

オルガは無言でアイゼンにグラスを受け取るように促す。アイゼンはオルガの無表情な人形のような顔に見下ろされるのに耐えきれなくなったのかグラスを受け取る。

受け取ったグラスに口をつけようとしたのを見ていると、ふとオルガの脳裏に昔本で読んだ一説が浮かんでくる。

「ミントは生えていますか？」

「……………えっ………わからない…」

突然の質問にアイゼンは、水を口に含んで唇を濡らしてから、ようやく口を開いた。

アイゼンの戸惑う声に、オルガは「そうですか」と特に残念そうでもない、何も感情を映さない声をあげる。以前見た本の一説に、喉に負担がかかってしまっている時に、清涼感があるミントの葉を浮かべて水を飲ませればいいという風にかかれていた。

どうせ水を飲ませるのなら、せっかく思い出したのだからミントの葉を浮かべた水の方がよいのだろうと思ったのだが――。

オルガは立ったまま、再び窓の外に目を向ける。

あれだけ草が生えてるとミントの一つや二つはありそうだ。

オルガは今日一日、お茶会や一人で部屋でぼうっとして過ごしたことを思い出して、明日はやることでできたかもしれない窓から下を見下ろしながら思った。

Calmy name 6

オルガは凶悪なほどに地上を照らし続ける太陽に辟易してため息をもらす。

きれいなレースがついたミントグリーンの帽子を、泥にまみれた手で直す。触ってしまった後で自分が非常にもったいないことをしたということが判明したが、もうどうにもならないのでそのまま作業を続ける。

外に出されることがなかったオルガにとって、自分の家の中庭が唯一外にでることが許された場所だった。オルガはそこで、草花をつんだり、花冠をつくったりして遊んでいた。

中庭なために、太陽が頭上にあるわずかな時間しか太陽が降り注がなかったあそことは違い、日中はつねに太陽の陽が注ぐこの中庭に、オルガはため息をもらす。

開かれた庭には、大きな噴水があり、オルガはそこで汚れた手を洗うと同時に、白いレースのハンカチを濡らして落ちてきた汗を拭いとる。

冷たいそれを目元にあてがったまま、石の上に座りこむ。

目的があったミントの葉はやっぱりあった。ミント以外にも、中庭でよく吸っていた花も見つけたので、オルガはそれを口に加えながらミントを拾い集めた。少し多いかなと思ったが、多いなら干してミントティーにでもしたらいいだろう。

オルガが一仕事終えた気分で休んでいると、屋敷の方から慌しい足音が聞こえてきた。

「奥様！ イネス様！」

使用人の悲痛な自分の名を呼ぶ声に、オルガはぱっと噴水から立ち上がると、そのまま木の陰に隠れた。

何故自分は隠れてしまったのだろう、そう思っていると目の前に今朝私にこのミントグリーンの衣装を着せてくれた侍女の姿があった。

赤毛の侍女はそばかすだらけの顔を、更に赤くして私の名前を呼ぶ。その悲痛な声に、オルガは隠れてしまった手前、いまさらこんな所からでて行くこともできずに、彼女を見続ける。

そういえば、一人で自室にいた時に特に周りに何も告げずにここまでできてしまった。

これは、それが原因か。

目の前を走っていったしまった侍女に、声をかけることができずにオルガはそのそと木の陰から姿を現す。

そうして、どうしようかなと考えこんでいると、突然後ろから肩を掴まれた。

ぐるりんと言わんばかりに身体をまわされたオルガの前に、怖い顔をして立っているアイゼンがいた。

アイゼンは、オルガのすっきり土で汚れてしまったドレスを上から下まで見てから、深いため息をついた。

「……………何をしていた」

「…………ミントを、とっていました」

オルガそう言って手に持っていた籠を差し出す。差し出したその中にはミントの他に

花冠も入っていた。花冠が入っている籠をみて、アイゼンは笑うとそのままオルガの腕を掴んで屋敷へと引っ張っていく。

「遊ぶのは結構だが、行く先をちゃんと侍女に告げろ」

家にいる時は一人で動いても特に何も言われなかったので、こちらでも何も考えずに行動してしまっただけで、屋敷に戻ったと同時に自分に駆け寄ってきたアネットと瞳に涙を浮かべる侍女たちに、自分が迷惑をかけてしまったということに気がついて「ごめんなさい」と小さく謝ることしかできなかった。

アイゼンは乱暴にソファに腰をおろすと、腹のそこから深いため息をついた。

すっかり疲れ切った様子のアイゼンの前に、水の入ったグラスが置かれる。アイゼンはそれを掴むと、一気に喉に流し込むと、テーブルにグラスを叩きつけるようにしておく。

「なんなんだ！ あいつは！！」

アイゼンの言葉に、グラスを差し出してきた男はクスクスと笑いだす。

「レイモンド、笑うな」

レイモンドと呼ばれた男は、薄い金髪の髪をかきあげながら更に盛大に笑いだす。

泥まみれの奥方様を引き連れてきた旦那様は、非常に恐ろしい顔で泥を落とせと侍女たちに命令してから仕事部屋へと戻ってきた。

散歩から連れ帰ってきた飼い犬を洗え、と命令したような物言いを出して更にレイモンドは笑い続ける。

「いやー本当に元気で変わっている奥方さまだよー」

間延びしたものいいに、アイゼンはぴくりと眉間にしわをよせる。「あなたが望んだのでしょうか、変わって面白って」

一通り笑い終えて満足したのか、レイモンドはアイゼンの前に腰をおろす。そして、ぐったりとした様子のアイゼンの代わりに書類に目を通し始める。

「貴族の娘はお高くとまっててめんどくさいが、あの子は違いそうだって言ってたじゃないですか。実際、違っていて面白いですし、あなたの望んだ通りですよ。いやーよかったですねー」

「……レイモンド」

地の底から這い上がってくるような声で呼ばれた、レイモンドは困ったというように肩をあげた。

「アグリット家の方に、香りが豊かなラベンダーが生えているという話を聞いて、新たな香料の原料になると思ってあなた自らいつてみたら、彼女にあったんですね。あちらの名士の家の夜会で。」

レイモンドの言葉に、アイゼンは不機嫌な顔を隠そうともせずに頷いた。

「帝都からきたあなたにキャーキャーいう田舎娘たちの中で、彼女だけはあなたに興味なさそうに立っていた。女性に冷たくされることに慣れていないあなたの心に闘争心をつけたわけだ。そしてアグリット家に結婚話を持ちかける。長女のために最初は頷かなかったが、援助の話をしたら渋々了承、でしたっけ？」

レイモンドに結婚にいたるまでの自分の行動を言われて、アイゼンは頭を抱える。

夜会であった時の彼女は、こちらの金にも何にも興味がなさそうだった。高級な香料を使用し香水などを作っているわが社の名前をだすと、女は大抵目をハートか金マークにして近寄ってくるというのに……。

興味をもって近づいて踊りに誘ってみると、「踊りは苦手なので」とあっさりかわされた。かわされた自分の周りに他の娘たちが近寄ってきて、彼女の情報を色々教えてくれた。

アグリット家の一人娘で、生意気で、本と勉強が大好きで帝都オングルの学校に進みたいと言っている変わりもの。

彼女を貶めるようなことをいう娘たちだったが、その思惑とは逆にむしろアイゼンは彼女に興味をもってしまった。

帝都に戻ってきてから、イネスの家のことを密かに調べてそれなりの家であることと、最近経済的に切迫している状況であるということがわかった。

相手の家のことをしってからはこちらのものだ、トントンと話を進めてしまったアイゼンはこうして目的のあのつれなかった娘を手に入れたのだ。

理知的な大きな湖畔のような瞳に、つるりとした額。つんとがった生意気そうな唇。

アイゼンはそれを思い出しながら、我が花嫁のことを思い出す。ぼんやりと空を映す瞳に、つるりとした額の上に浮かんた眉からは意志の強さを感じられない。つんとがった生意気そうな口、ではあるが、そこからもれるのは間延びした声。

声も見た目もまったくあのままなのに、なぜここまで違う。

アイゼンのはほんとした、未だに掴みどころがわからない妻に頭をかかえる。

もつと、頭のいい女だと思った。のほんとした、柔らかさしか良い所のない女とは違う。

目の前のレイモンドは書類におとしていた瞳を、こちらに向けながら二ヤリとほほ笑む。

「ああゆうタイプ苦手だったよね」

「ああ、お前の嫁と一緒に苦手な分類に入るな」

「ちよつと、人の奥さんのことを持ち出すなよ。そんなこというと、もうこっちに寄越さないぞ。最近ただでさえ、イネス様、イネス様ばかりで、旦那さんとしては寂しい思いをしているんだからな」

レイモンドの脅しに、アイゼンはぐつと口を閉じる。

「街に慣れていない奥方殿を、少しでもこっちに慣れさせるために毒にも薬もならなそうなお前の奥方を貸せだっけ、本当にひどいよね」

「余計なことを教えられたら困る。それを考えたら、アネットが一番よかった。俺の姉や妹は遠くに嫁いでいるし、母はとうの昔に死んでいるし……知っている女はお前の奥方しかいなかった」

「肉体関係を持たないでいる女性の知り合いはいないんだもんね。まさか、昔の女に嫁のめんどろななんて、そんな厚顔無恥なこと言えないか」

だから、もつと節度をもった生活しなよって言っていたじゃないか。

そう説教を垂れ始めたレイモンドに、アイゼンは自分の額で血管がブチブチと音を立て初めているのがよくわかった。

「そんだけ望んできてもらったわけなんだからさ、もつと優しくしてあげなよ。こっちに友達いないんだらう」

「アネットがいる……」

「アネットは俺のだもん」

「……………馬鹿がっ」

「結婚前に仕事も結構片付けて、三週間くらいは自宅にいれるようにしたんだからさ、もっと交流をもちなよ。言葉より身体のほうが伝わるものってのもあるんだしさ」

「ちゃんとウインクしてきたレイモンドに、アイゼンはイライラして舌打ちしてしまう。」

「そんなに、最初にあった時に君のことを覚えていなかったことがショックだったの？」

「触れられたくないことに触れてきたレイモンドの足を、机の下で思いつきりふんづける。レイモンドは顔を歪めながらも、アイゼンに言葉を続ける。」

「たった一回あったきりの人間を覚えているなんて、そんなこと求めるほうがどうかしていると思うけど」

「俺は覚えていた」

「そりゃーそうでしょう。そう言いたげなレイモンドの表情に腹がたって、アイゼンは更に足に力を込める。」

「いだだっ、いだっ」

「ふんっ」

「ようやく悲鳴をあげたレイモンドに、アイゼンは満足げに鼻を鳴らすとようやく足を解放する。踏まれた足をさすりながらレイモンドは、恨めしげにこちらをみてる。」

「本当のこといたら人間って怒るんだ……………」

「足を再び持ち上げたアイゼンに、レイモンドは降伏するといわんばかりに両手をあげる。しかしあげながらも、レイモンドは更に言葉が続ける。」

「今飲んだ水があるだろう。ちょっと、喉がすうつとしなかったか？」

「……言われてみたら」

「それ、イネス様がとってたミントの葉だよ。アネットが寄越してくれたんだ。イネス様に外で何をしていたのか聞いたら、これお前

の為にとつてたんだって」

レイモンドの言葉に、アイゼンは飲みほしたグラスを数秒見つめてから、黙って腰をあげると部屋から出て行った。

Call my name 7

「イネスは？」

廊下であったアネットにそう尋ねると、アネットは少しだまってこちらを見上げてからにつこりとほほ笑む。

「お部屋で落ち込んでいられますわ」

「そうか…」

アネットの言葉に頷くと、アイゼンはさつさと部屋へと向かっていく。アネットは新妻のもとへ駆け足で去っていくアイゼンを見送りながら、自分も旦那様に会いたいなと思った。

「入るぞ」

ノックも手短に、アイゼンは部屋のドアをあける。

イネスはいつもの、窓際の席に腰かけていた。

日中に突然やってきたアイゼンに、イネスはだまったまま椅子から立ち上がる。いつもの動作に、アイゼンは鷹揚に頷きながら、イネスの前の椅子に腰をかける。

「……座ってればいいだろう」

「はい…」

アイゼンの言葉に、ようやく腰を下ろしたイネス。

「……………さっきミント入りの水を飲んだ」

「………はあ…」

普通こういったら、ちょっと頬をそめたりして恥ずかしがるものではないのだろうか。プレゼントをもらってすぐに感想を言いに来たとなったら、女というもの（というか人は）はほんの少しでも胸を躍らせるものではないのだろうか。

アイゼンは、妹が昔読んでいた恋愛小説を思い出しながら、表情を変えないイネスを見つめる。

「すっきりした——」

「それはよかったです。摘みがいがありましたわ」

「そ、そうか」

「ええ」

真面目な顔で頷くイネスに、アイゼンは黙り込む。

脳裏で描いていたものと違った、もうすこし、甘い雰囲気になると、思っていた。

アイゼンは会話を続けることができずに、黙り込んだままイネスを見つめる。アイゼンと違い、イネスは居心地悪さを感じていないのか、じいっとアイゼンを見つめ返していく。

「……………まだ、あるのか」

「ええ」

「果実を絞ったものより、よかった」

「……………残ったものは、ミントティーにしようと思っていますので、出来たら飲みますか？」

「ああ」

仏頂面で頷いたアイゼンに、オルガはこの人は楽しいのか嬉しいのかそれとも不機嫌なのかさっぱりわからないと思いながらも、とりあえず頷いた。

いつものように意地悪なことを言わずに、黙り込んだままのアイゼンを前にして、ほんの少し落ち着かない気分になって立ち上がる。突然立ち上がったオルガに、アイゼンは思わず手を伸ばして彼女の腕を掴んでしまう。

突然掴まれたオルガは、静かに首をかしげた。

「どこへ行くんだ」

「どこへも行きません。ただ、お茶を用意してもらおうと思っただけです。いりませんか？」

「そうか……」

アイゼンの手から力がぬけたことを確認すると、侍女を呼ぶため

にドアへと向かった。

「侍女を呼ぶのだったら、ベルで呼べばいいじゃないか」

「ああ、そういった便利なものもあったのですね」

「君の家にはなかったのか」

「……あつた——かも、しれませんね」

ぼんやりと頬に手をあてながらつぶやいたイネスに、アイゼンは自分の家の勝手もわからないなんて、と口をあぐりと開けてしまった。

いや、しかしこの前言ってた、母親に言われたという「屍みたいになんかべらない」を思い出す。実の母親が実の娘にそう言うだろうか？

イネスのぼんやりとしたどこか浮世離れた様子は、家での生活も影響しているのかもしれない。

ドアを開けて、廊下に顔を出して侍女を読んでいるイネスの後ろ姿を見つめながら、自宅でもこうしてひっそりと使用人を呼んでいたのか、それとも呼びもせずに自分一人で生きていたのだろうかと思うと、暗い屋敷の廊下にイネスが一人で立っている姿がまざまざと想像できて、アイゼンは小さく後悔のため息をついた。

侍女にお茶を持ってくるように頼んだイネスは、ゆらゆらとこちらに戻ってきた。そして静かに椅子に腰を下ろす。

「今度、外に出かけよう」

腰を下ろしたと同時に聞くと、イネスは瞳をまたたかせる。パチパチと揺れるまつ毛を見つめながらアイゼンは更に言葉を続ける。

「何か欲しいものはないのか？ 必要なものとか」

アイゼンの言葉を吟味するかのように、イネスの瞳が細くなる。思案するかのように、目を伏せるイネスを見つめながら、アイゼンはイネスの言葉を待つ。

「外に、行きたいです。本当に外に」

「何か欲しいものがあるのか？」

「いえ、ただ、本当に外へ」

「……それだけいいのか？」

イネスは数秒してから、深く頷いた。初めて彼女から、彼女の望むものを引き出すことができたアイゼンは、侍女が持ってきたお茶を口に運ぶ。

口に入れた途端に、拡がるハーブの、ミントの香りに、アイゼンはもしやと思ってティーカップを持ったまま、イネスに問いかける。

「これは今日のミントか？」

「市販のものです」

そんなにすぐ乾くわけねーだろ、イネスの無言の瞳がこちらにそう訴えかけてきているような気がしたアイゼンは、ぱっと紅茶も途中で「仕事が残っていた」と立ちあがる。

突然立ちあがったアイゼンに、イネスは静かに手のうちのティーカップの中身を喉に流し込んでいる。立ちあがることもせず、こちらを見上げてくるイネスに、アイゼンはほほ笑むこともできずにいつもの仏頂面で背を向ける。そして部屋から出て行こうとした時に、ちよつとだけ振り返って椅子に座ったままの彼女をちらりとみながら「三日後の朝早くに出かけるから、準備をしておいてくれ」と捨て台詞を残しながら去って行った。

Call my name 8

「どこへ行くのですか」

街の方へいくのかと思っていたのだが、どうやら馬車の窓から外をみていると郊外へと向かっているらしい。家を出てからずっと外の流れて行く田園風景を見ながら隣に座るアイゼンに訪ねてみるが反応が返ってこない。

二人つきりで馬車に乗りながら、堂々と無視されるなんて、昨日ほんのちよつとだけ優しそうに見えたのだけど、オルガはわからない人だなと思いつながらちらりとアイゼンの方を見てみて、返事の帰ってこない理由がわかった。

両腕を抱え、そこに顔を埋めるようにして寝ているアイゼンに、こんな体制でよく寝れるなと思いつながら、彼の顔をまじまじと見つめる。

こんなに間近からアイゼンの顔を観察するのは、初めてだった。思っていたより長いまつ毛の下にあるクマは初めてあった頃より大分薄くなっている。肇はあまりの形相の悪さに、いやだなと思ったオルガだったが、こうして寝ている姿をみると思いのほか幼い顔をしていることがわかった。そういえば、この人は何歳なんだろう。オルガは、初めて自分が彼について何か知りたいと思っていることに気がつかないまま、揺れるアイゼンの前髪をじっと見続けた。

馬車がようやくやくついた場所で、すっかり爆睡してしまったアイゼンを揺り起こすとアイゼンはほんの少し恥ずかしげな顔をして、口元をぬぐうと馬車から下りて行く。

先にズンズンと降りて行ってしまったアイゼンを見送ってから、オルガが馬車から下りようとする就先に降りたアイゼンがこちらに手を差し出してくる。

ほんの少し戸惑いながらも、アイゼンの手に指先を重ねると、ぎゅっと握りしめられる。オルガは居心地の悪かったが、なんとか耐えて馬車から身体を下ろす。地上に下ろされたイネスと入れ替わるように、再びアイゼンが顔を馬車の中にいれると中からオルガの帽子をとってくれる。

バラ色のそれを少し乱暴にオルガの頭にかぶせると、そのまま歩きだしてしまう。オルガは帽子の中でぐしゃぐしゃになってしまった髪を直しながら、再び帽子をかぶりなおすと早歩きのアイゼンの後ろをついていく。

「どこへ行くのですか？」

馬車の中で無視された言葉を再び問いかけると、アイゼンはすぐにわかるといって口を閉じて黙々と歩き続ける。

そうして二人で木漏れ日の中を歩き続けると、森の少しひらけた場所に小さな小川があった。葉の隙間からこぼれ落ちた太陽の光が、水面を反射してキラキラとまたたいてる。

オルガは初めてみる小川に、ふらふらと近寄っていく。そして脇にしゃがみ込むと水面に顔を映す。

「……あっ……」

揺れる水面に魚が泳いでいるのが見えた。人になれているのか、それともあまりにも人がこなさすぎて防衛本能が薄いのか、オルガの影の下で悠々と泳ぐ小魚を見つめていると、後ろから覗き込むように黒い影がオルガの影を覆い尽くす。

オルガは座ったまま上をむくと、そこにはアイゼンの姿があった。喉をそらしながらこちらを見上げるオルガを、上から見下ろしながら「やっぱりこういうのが好きか」と尋ねてくる。

「下に何もせずに座りこんでしまったな……」

水際ゆえか、柔らかい土の上にバラ色のドレスのまましゃがみ込んでしまったオルガはしまったと思って立ちあがろうとしたが、アイゼンがもういいと言わんばかりに立ちあがろうとしたオルガの肩を掴む。

「こういう所によく来たのか？」

「いいえ」

「あちらは、こっちより自然が多いのではないか？」

「両親が許さなかったの——危ないといって」

危ないと言われて外にだされなかったのはイネスだった。

オルガは出たいとも思わなかった。暗い屋敷で、イネスが持つてくる本や図書室の本を読んで、中庭で花を手折って、家庭教師の気難しい老人に叱られながらも勉強をして。

オルガの暗い顔に気がついたのか、アイゼンは軽く笑いながらオルガの頭にかぶせた帽子をとっていく。

「だからそんなに白いのか。君は——もっと陽にやけた方がいい」「美白が女性の美德では？」

急に開けた視界で、まぶしい水面に目を眇めながらアイゼンに尋ねると、アイゼンは隣にいつの間にもっていたのか、布を引いてその上に腰かける。

腰を落ち着けたことでようやく一心地ついたのか、少し碎けた様子でこちらに目を向けてくる。

「もう売れたんだからいいだろう。それに俺がいいって言ってるんだ、もっと君は健康的になるべきだ。心も、身体も」

アイゼンの少し真面目な瞳におされて、オルガが立ちあがろうとすると、アイゼンの敷いた布がオルガのドレスを踏んでいたみたいで、前につんのめったオルガはそのままどうすることもできずに水面に顔から飛び込んでしまう。

オルガは産まれてはじめての小川の冷たさに、心臓が痛いほどに弾むのを感じた。それほど深いわけではなかったの、両手をついて水面に顔をのぞかせる。前に垂れてしまい、視界を邪魔する前髪の合間からアイゼンノ方を見ると、アイゼンはこれまで見たことがないほど瞳を大きく開いてこちらを見つめていた。

「……………すまない」

腰を中に浮かしたままのアイゼンが、恨めしそうなオルガの視線

に気がついたのか、わずかに肩を震わせながら謝ってくる。

オルガはどうしたらいいかわからなくて、水につかったままアイゼンを見続ける。そうしていると、ついに耐えきれなくなったといわんばかりにアイゼンが腹を抱えて笑いだした。

「君は、そんなっ、目を開くことができたんだな！　落ちそうだよ！」

ハハハ、と軽やかに笑い続けるアイゼンを見ながら、オルガは「あなたもそれだけ目を開けるんですね」とせいぜい嫌味を返すことしかできなかった。

ぬれ鼠になってしまったオルガに笑いながらアイゼンが手を伸ばしてくる。オルガは前髪を絞っていると、アイゼンが後ろ髪をしばらくはじめる。

別にしなくてもいいのに、と思いながらも自分でやるよりは見えている彼がやるほうが確実だろうと思っただけのまま身を任せる。

「ドレスは——どうしようか」

アイゼンはオルガのびしょぬれのドレスを持ち上げながら、こっちに問いかけてくる。

どうしたらいいかわからないオルガは、首をかしげながらも「こうしたら乾くんじやないですか？」と言うと、アイゼンは「これだけ濡れたら無理だろう」と笑いを噛み殺しながらこちらをみてる。

「着替えも持ってきてないし、家まで帰るにも時間がかかって絶対に風邪をひくな……」

じゃあ、どうしたらいいのよ。

アイゼンの言葉で、寒気を感じたオルガは両肩をかかえ大きく震える。

それをみたアイゼンは、とりあえず馬車まで戻ろうといって、オルガの肩に下に敷いていた布を臨時でかけてくる。草の上にいてさらに大の男一人が腰を下ろしたのだから、草がつぶれたせいで青臭いかおりがする布を巻きつけられたオルガは、普通自分のお尻の

したにしいた（しかも直接地面に）のを女性の身体に巻きつけるだろうか、とちよつと疑問に思ったが、肩を押されるようにして前に歩けと言ってくるアイゼンの思いのほか真剣なまなざしを見ると、何も言えなくなつてただ肩を掴む大きな手の温もりを感じてオルガは顔を伏せた。

Call my name 9

屋敷に戻るとアネットの姿があった。

今日が出かけるからこなくともいいと連絡していたはずだが、部屋から飛び出してきたアネットはびしょぬれのオルガに気がつく走り寄ってくる。

「どうしたのですか!？」

いつもの優しい感じとはちょっと違い、こちらを責めるような言い方をするアネットにオルガは首をちぢこませて黙り込む。まるで母親に叱られた子供のように、しゅんと肩を落とすオルガの肩を覆う布に気がついたアネットは今度は矛先をアイゼンに向けた。

「あなたがついていてどうしてこんなことに!？ それにこの布はなんなんですか？ もっとまともな布はなかったの？」

草の汁がしみ、ところどころに泥がついた布をまとったオルガの姿に、アネットはこめかみをひくひくしながら、アイゼンを乱暴な口調で問い詰める。詰めよられているアイゼンを見ていると、アネットがいた部屋の中からもう一人誰かが騒ぎに気がついて出てくる。

オルガがそちらに顔を向けると、そこには美男子というのにふさわしい金髪碧眼の男性が立っていた。立ち方も優雅な彼は、オルガがこちらを見ていることに気がついたのかふっと頬笑みを寄越してくる。オルガはその笑顔にうさんくささを覚えて、この人は自分の容姿をしっかりと理解していて、それを存分に利用してきたんだなと思った。

誰にでも、特に女性となればキャーキャー言われ続けたであろう男は、オルガも自分をうっとりとした瞳で見とれると思っていதாக、つれなく視線をアイゼンとアネットに戻すオルガを面白そうに見てくる。

男はオルガの前にゆったりとした様子でやってくると、オルガの

前で優雅に腰をおる。

「こうして直接お話するのは初めてですね。レイモンド・ミハエルと申します」

丁寧な挨拶をしてきたレイモンドという男は、下から覗き込んでくるようにしてその甘いマスクをこちらに向けてくる。

「以前：お会いしたことがありますか：？」

すぐく失礼なことを聞いているというのはわかるが、そちらだつて直接話すのは初めてだと言っている。結婚式の時いたのだろうか、そう思いながら問うと、レイモンドは思った通り「結婚式で一度」と言ってきた。

屋敷にいて、しかも使用人の格好もしていないということは、アイゼンの会社の人だろうか、そう思うとどう返したらいいかわからなくてオルガは固まってしまう。

どういう対応をしたらいいかわからないと、弱った様子のオルガに気がついたのかレイモンドは優雅な笑みをくずさずに上体をあげると、聞こえてきたアネットの声につられるようにそちらに顔を向ける。

いつもはおっとりとした様子のアネットの、激しい物言いにアイゼンは押される形で、一步後ろにさがる。

「他に何も、なかった」

「だからといってこれはないでしょう！」

アネットの責めるものいいに、アイゼンは黙ったまま目の前までやってきたアネットに口を閉じざるをえない。

「自分の着ている上着を貸すとかは考えなかったんですか！？」

アネットに言われて、はじめてそれに気がついたという顔をしたアイゼンに、アネットは「気が利かない：」と小さく吐き捨てて、深いため息をつくと踵を返しこちらに近寄ってくる。オルガの前に立つレイモンドを押しつけるようにして前に立ったアネットは、オルガの冷たくなった手をさする。

「イネス様、寒かったでしょう？　すぐにお湯を沸かすように伝え

ますからね」

「あまり、あまり―寒くありませんでした……」

背を壁につけたままの状態で動かずに、ずーんと沈んだ様子のアイゼンを見ながらオルガは言葉を続ける。

「アイゼン……様が、ずっと馬車の中で寄り添ってくれたので―」

オルガの言葉に、アネットはぱっと口元に手をあてると、オルガとアイゼン、二人の顔を何度も見渡してから、隣にたつレイモンドと顔を見合わせる。

アネットの言った「気が利かない」という言葉が、グルグルと頭の中で渦巻いてオルガが初めて自分の名前を呼んだことなど気がつかずに、落ち込み続けているアイゼンをみて、オルガは笑いたくなかったが、ぐつと唇をかみしめる。

そうすると、ブルブルと震えだした肩に、アネットは寒さで震えていると勘違いしたのか、隣に突っ立っているレイモンドに侍女たちに早くお湯を用意するよう伝えろと背を押しながらせかしているのを聞きながら顔を伏せる。

濡れて束になったままの髪が落ちてきて、オルガの顔を隠すそれに、オルガは安心してようやく口元をほころばせる。

そうやって震える肩をおさえていると、心配したのかアイゼンがこちらに近寄ってくる。震える肩に手をあてて、大丈夫かと真面目な顔で尋ねてくるアイゼンと先ほどのアネットの言葉にシヨックを受けた様子のアイゼンが一致しなくて、オルガは思わず吹きだしてしまう。

オルガの吹きだし笑いを、くしゃみと勘違いしたアイゼンは更に真面目ぶった様子でたずねてくる。オルガは口元をおさえると、こもった声で「大丈夫です」と返事をする事で精いっぱいだった。様子のおかしいオルガに気がついたアイゼンは、ようやく自分が笑われていることにわかったらしく、心配げな声が一気に不愉快な声音になる。

「……どうやら、笑われているらしいな」

「すみません」

素直に謝ったオルガに、不機嫌を顔に貼り付けたような顔をしていたアイゼンはふっと顔から力を抜くと疲れたようにため息をつく。「もう、いい。思ったより、君は……イネスは、笑い上戸なんだな」

口元を押さえたままだったオルガは、アイゼンが自分の名前を呼んだことに気がつくまで数秒時間がかかった。

そうだ、今までは名前で呼ばれずにいたのだが、私はイネスなのであった。

忘れていたわけではない。侍女に朝起きて呼ばれるたびに気が引き締まる思いがしたし、母のあまり恥をかかせるなという言葉は、何度も何度も自分の内で反芻していた。

だけど、この人と二人きりで話す時は――

だけどこの人と話す時は――、アイゼンを見上げながらオルガは口を閉じる。

じいっとこちらを見上げてくるオルガに、アイゼンは首をかしげる。

「どうした」

「……いいえ」

先ほどのまでの笑顔を押し隠し、暗い顔をしだしたオルガに、アイゼンはそれ以上なにも言わずに「早めに身体を温めろ」といって去っていく。

オルガはその広い背に何も声をかけることができずに、ただ見送ることしか出来なかった。

次の日目覚めたらすでにアイゼンの姿はなかった。

寝起きでふわふわしたままの頭で、オルガは上体を起こす。

ぼーっとしたままの頭で、ベットの脇のベルに手をかける。あちらの家にいた時は、服を着る時は簡単なものばかりだったので自分一人で大丈夫だったが、こちらにきて以来いくら普段着といっても後ろのレースの紐が複雑な形が多く、自分一人で着れるものは少ないし、それに普通の貴族の人たちは自分で着替えるということはないらしい、のでオルガはいつもこのベルがまるで犬を呼ぶみたいで慣れないと思うながらも、さすがにこの寝巻姿で廊下に出るのはマズイのでベルを揺らした。

するとすぐに赤毛の侍女がやってくる。オルガはまだ半分寝ぼけた顔で侍女の朝の挨拶に答える。

顔を洗った後に、ドレスの紐を背の後ろで結ばれながらオルガが前を向いていると、後ろにいる侍女が珍しく口を開いた。

「今朝早くに旦那様がお仕事で、奥方様の実家の方へ向かわれました」

オルガはほんの少し後ろを振り向きながら、「そう」と気のない返事をする。

「奥方様を連れて行かれるか迷われた様子でしたが、よく眠っていらっしまったので。三日程度で戻るとのことでした」

「……ほんとうに急なのね」

レースを全ての穴に通し終えた侍女は、一つ息をついてからそれを結び付ける。

そして椅子にオルガを座らせると、髪に櫛を通し始める。オルガは少し後ろに引っ張られながら、鏡越しに侍女を見つめる。

「ご実家でとれる珍しい花の香料をすぐにでも商品化したいらしい

ですわ、花の命は短いものですからね、急いで現地向かわないと枯れてしまうことや、一番香りだかい時期を逃してしまうこともありますから」

そういつてほほ笑む侍女の話を聞いて、オルガははじめてアイゼンの仕事の内容がわかった。思わず「そういう仕事をしていたのですか」と漏らしそうになったオルガは開きかけた口を閉じて、さすがに それを聞くのはどうかと思って黙って髪を結びあげていく侍女を見つめた。

オルガに見つめられていることで緊張したのか、侍女の動きがぎこちなくなる。オルガは視線をそっとそらしながら、そういえばこの侍女の名前を自分が知らないことに気がつく。

「……あなたの名前は、なんというんですか？」

侍女は最初自分に言っているのだと気がつかなかったらしく、周りにいる他の侍女に目を向ける。キヨロキヨロとあたりを見渡してから、ようやくオルガが自分を見つめていることに気がついた侍女は顔をほんのりと赤らめると小さく、オルガに聞こえるだけの声量で「リリアと申します」と告げる。

オルガはこの赤毛の侍女が、自分が何も告げずに姿を消してしまった時に探し回ってくれた子であるということ覚えていたので、リリアをガラス越しに見つめながら「あの時は何も言わずに消えてしまっでごめんなさい」と謝った。

突然使えるべきものから謝罪を受けたりリリアは、非常に慌てふためいたが最後には小さく頷いてくれた。

お昼に近くなり、いつものように訪ねてきたアネットにオルガは昨日の礼を告げる。

目の前で頬笑みながら茶菓子に手をつけるアネットは、謙遜しながらお茶を口に含む。昨日のアネットの剣幕をみて、この人は怒らせたら怖い人なのだということがわかったオルガはちょっとびくびくしながら、そういえばとオルガに昨日のレイモンドという人物のことを尋ねる。アネットのあのせつついている様子をみると、非常

に近しい人物のようだと思ったオルガは、昨日あの後うやむやになつてあれつきりな、彼の名前をアネットに向ける。

「昨日のレイモンドという方は……？」

オルガの言葉にアネットは、ティーカップを置くと以外だといわんばかりに目を開いた。

「あら、まだ紹介されていませんでしたか？」

「ええ……」

アネットは深くため息をつく、額に手をあてる。

「ええつとですね、レイモンド・ミハエルは——私の夫です」

アネットはふうつと息をつきながら、少し恥ずかしげにこちらに視線を超越す。

「レイモンドったら、まだイネス様に紹介されてなかったのね——。紹介が遅れてすみませんでしたね」

アネットはうふふと頬笑みながら、再び焼き菓子に手を伸ばす。

アネットの謝罪に、オルガは首を横に振る。

「いいえ。あの人が、紹介なさらなかっただけだと思います……」

「あの人って、アイゼン様のことですか？」

アネットの声にちよつとした威圧感を感じて、オルガはおずおずと頷いた。

「昨日は、名前を呼んでいらしたじゃないですか」

オルガが首をかしげると、アネットは更に言葉が続ける。

「ちゃんと私は聞きましたよ。びしょぬれになって帰ってきたとき、私に怒られているアイゼン様をかばうように言われたじゃないですか」

そこまで一息でいったアネットは、そこから少し頬を染めた。

「アイゼン様が、温めてくださったって」

オルガは机に顔を突っ伏したい気持ちでいっぱいになったが、ぎりぎりの所でなんとかこらえた。背中から鳥肌が立ちあがりそうなかで、アネットは頬笑みながら芝居がかった声で続ける。

「それにアイゼン様だって、イネスとお呼びになられて……」

イネス、という部分だけやけに低くいったのはアイゼンの声真似だろうか、全く似てないそれにオルガはだまって紅茶に口をつける。平常心を保とうとするのに必死なオルガに気がついたのか、アネットは何もわかってないようで全てをわかつている意地の悪い笑みを浮かべた。

「どうやって温めてくださったんですか？」

そのところを詳しく教えてくれませんか？そういつて、紅茶に口をつけるアネットは、この話を肴にするのだといわんばかりの笑顔でオルガに詰め寄ってくる。

「普通に、隣にいらただけです」

どうやって逃げたらいいかわからないオルガは、実に簡潔に答える。

そんなので納得するわけがないアネットは、頬笑みながらさらに突っ込んでくる。

「隣とは、右ですか？ 左ですか？」

「……左です」

「どうしてそういうことになったのですか？」

「：私が、震えていたら、寒いのか、といって」

寒いのかと言ったとたんに、アネットはきやあと声をあげた。話すのをやめてしまったオルガに気がつく、先を促すようにして笑顔に向けてくる。

「そして、私が少し寒いといったら、他になにもない、とおっしゃって……それで——」

「それで？」

「それで……」

オルガは救いを求めるように、後ろにたつリリアに目をむけたが——、リリアも実に興味深いといった瞳でこちらをみってくる。新しい紅茶をいれにきた侍女の耳も、びんびんに済まされているのを見て、逃げることを諦めたオルガは覚悟を決めて口を開いた。

「肩を寄せられました」

「で、何か言われたのですか？」

「寒くないか、と――」

「それでなんと？」

「寒くないです、と答えました」

オルガの面白くない答えに、それまで嬉々として聞いていたアネットがぐくつと肩を揺らす。

「他には…？」

救いを求める信者のように、さらなる真理の追求を求めてくるアネットにオルガは無情にも告げる。

「他には何もありませんでした」

Call my name 11

「連絡もせずに突然訪問してすみませんでした。リーグ殿」

アイゼンは執事から手渡されたタオルで濡れた頭を拭きながら、前に座るイネスの父親に頭を下げる。

「いえいえ。あなたはもう我が息子なのですから……」

イネスの父はそう言いながら、アイゼンにもソファアに座るように促してくる。言葉に甘えて、ソファアに座ると、母親の姿が見えないことにきがついたアイゼンは口を開く。

「アウラ様は――？」

突然の雨で暗くはなっているが、まだ寝るにはあまりにも早すぎる時間帯なのに、屋敷に入ってから姿を見せない奥方の姿を、心配に思ったアイゼンは口を開く。

アウラのことを聞かれたリーグは、疲れたようなため息をつくと言いにくそうに口を開く。

「妻は、今体調を崩してしまして……」

「それは……それは、いつからなのですか？」

結婚式の時は普通に見えたが、アイゼンの問いにリーグは額に手をあてる。

「式が終わって、こちらに帰ってきてからすぐに」

「……イネスは知っているのですか？」

アイゼンの言葉に、リーグは今度こそ顔を伏せて力なく首を横に振った。

「じゃあ、戻ったらすぐにイネスに伝えましょう。なんだったら、こちらに見舞いにくるのもいいかもしれない」

憔悴したリーグの姿に不安を覚えたアイゼンは、慰めるように出来るだけ優しい声をかける。アイゼンの言葉に、リーグは黙ったまま頷いた。

すっかり意気消沈しているリーグに、身体の調子がおもわしくな

いアウラ。

ただでさえ、鬱蒼とした森の奥にある屋敷だか、主二人の不調もあいまってか更に重苦しい空気を放っている。

音もなくすべるように歩いていく侍女たちは、本当に生きているものなのだろうか、すれ違う人の陰気な雰囲気アイゼンはそう思いついながら、前を歩く執事の後についていく。

こちらについたとたんに振りだした雨に、花畑を視察していたアイゼンはびしょぬれになってしまった。あの花畑から一番近いのが、イネスの実家だったので、山地の寒さに骨の芯まで冷えてしまったアイゼンは、申し訳ないと思いますが、連絡なしの突然の訪問をした。

婚約の申し出をして以来きていなかった婿の突然の訪問を、この家は静かに受け入れてくれた。時間がずっと止まっているかのような、暗い廊下を歩いていると、執事が立ち止まって客間を開いてくれる。ここが今日一日の宿か、執事が部屋を出て行ったのを見送ると、アイゼンは窓際によって窓を開く。

「真っ暗……だな」

開いた窓から見えるのは、黒く塗りつぶされたような森の木々と、その頭上に浮かぶ月だけ。月光によって形だけが浮かび上がる木々は、ざわざわと不穏にざわめいている。まるで木々の影に何者かが潜んでいるような、そんな気がしてアイゼンは窓を閉める。

閉めた後でベットに腰を下ろすと、深く息をつく。

静かな、静かな森の中の屋敷。

イネスはここで生まれ、そしてここから出ることもなかった。

若い娘なのに、何が楽しかったのか、静かな屋敷に沈むようにして横たわるイネスを想像して、アイゼンは瞳を閉じる。

彼女は、この屋敷で何を思っ、て今まで生きてきたのだろうか。

今日は一日移動したゆえに、疲れきっていたアイゼンだが、一度想像の扉を開いてしまうと、いてもたってもいられなくなって立ちあがる。

執事を呼ぼうとベットの脇をみると、ベルが置いてあったので「やっぱりあるじゃないか」とアイゼンは、イネスのことを笑いながらベルに手をかけた。

さっき送ったばかりだと言うのに呼びだしたアイゼンに、執事は嫌な顔ひとつせずに見れる。

「すぐに呼んですまないな」

客人の言葉に、老人は静かに首をふるとご用は何かと声をかけてくる。

「…妻が、イネスが家にいる時はいつも図書室にいたと言っていたのでな、少し見てみたい」

「……こちらへ」

執事に促されるがままに、アイゼンは屋敷の中を歩いていく。

屋敷の一階の中庭に面した部屋に置かれた図書室を、執事は開く。

「お嬢様以外、入る人がいなかったの……」

人間が二人行き違うことが不可能なほどの道しかない、そんな狭苦しい場所の両脇には頭上高くまである本棚の中に上から下まで本が詰まっている。執事が梯子にかけられた布をはずすと、埃が宙をまっただ。

「彼女は、ここがずっと好きだったのか？」

「ええ。お嬢様は、気が付いたらここにおられました……」

執事は布を几帳面に畳みながら頷く。

「ここに、ずっと」

「自室にいらっしゃらない時は、ここか中庭にいるのがつねでした」
執事は静かに頭を垂れると、図書室にアイゼン一人を置いて去っていく。

一人残されたアイゼンは、圧倒されるような息苦しさを感じて下から上までずらっとならんだ本を見つめる。

娯楽の一つもみあたらないここで、確かに本はよい暇つぶしになっただろう。

アイゼンは本棚に肩を預けて瞳を閉じると、幼いころのイネスが

座りこんで夢中で本を読みこむ姿が安易に想像できた。

アイゼンは蔵書に目を通すと、男性が読むような経済論から、医学書や図鑑など様々なジャンルがはいっていることがわかった。イネスがいたところから動かされていないだろう梯子をのぼり、上までついて目の前にある本を見る。

そこにあつたのは、アイゼンにも見おぼえがある本だった。

妹が小さいころ呼んでいた恋愛小説。男は王子様、女はお姫様ばかりで、甘いセリフをこれでもかと吐き続ける王子に妹はうっとり眼を輝かせていた。

イネスも、この暗い部屋でこれを読んで胸をときめかせていたのだろうか。

自分の結婚を前にして、若い恋愛小説を手にしたイネスを思っ、アイゼンは黙り込んだ。

摘みたての花からとれた香料のにおいを確認しおわった、アイゼンは再びイネスの家へ帰ってきた。

街の方に宿をとっているといったのだが、リーグがうちに泊まればいいと言ってくれたので、ありがたくその提案を受け入れた。帰ってきたアイゼンに執事は仰々しい程に頭を下げる。

「仕事が終わったので、早めに家に帰ろうと思う」

「そうですか……」

「その前に、アウラ様に一度ごあいさつしたいのだが……」

ここにきてから二日目の朝だが、まだ一度もアウラの顔を見ていない。

アイゼンの申し出に、執事はひとつ頷くと「旦那様に聞いてまいります」と言って去って行った。

リーグの許可を得たアイゼンは、リーグと共にアウラの元へと向かう。

寝台の上に横たわったアウラは、眠りにについているらしく胸がわずかに上下しているのが見えなければ、まるで人形のように見えた。真っ白な顔をしたアウラを見て、アイゼンは痛ましげに眉をひそめる。

「もともと、身体が丈夫な方ではなかったのだ……」

リーグは落ちてきた妻の前髪を撫でながら、お恥ずかしいと言葉を続ける。

リーグの腕が触れたことで、アウラは身じろいだ。そしてわずかに瞳を開いて、揺れる瞳で目の前にいるリーグを見つめる。

「イネスは……？」

「イネスは……」

「イネスを、早く、イネス……」

アウラの言葉に、リーグは頷きながらその手を握り返す。アイゼンをそれを後ろで見ながら、そっとアウラから目をそらした。

面会が終わったあとで、アイゼンはすぐにリーグに声をかけた。

「イネスを連れてきますよ」

誰もイネスをこちらに寄越さないとはいっていないのだ、それにあれだけ憔悴しきっていた母親をみて、誰が無視してにいられるだろうか。

その言葉に喜ぶと思われたリーグだったが、あまりいい顔をしないリーグにアイゼンは更に言葉を続ける。

「あれほどアウラ様の具合が悪いのです。別に新婚早々嫁が帰ったと、まわりの人間に笑われるぐらい、私はなんとも思いません」

体裁を気にしていると思ったのでそう言うと、リーグは不格好に頬笑みながら「ありがとう」とだけ言って、すぐにアイゼンを置いて去ってしまった。

主人が去った後一人で廊下に残されたアイゼンは、ふと外に目を向けると中庭が目にはいった。それなりの広さをもつ中庭は紫色に染まっていた。

ここで遊んでいたのだろうか、そう思うとアイゼンは、中庭にでれる場所を聞こうと使用人を探し始めた。

「……お帰りなさい」

言葉の前に数秒の間があったのは気にしないで、アイゼンは玄關に現れたオルガに頷き返す。すぐに仕事に戻るとでも思ったのだろうか、一人静かに夫婦の居間へと戻ろうとしたオルガを、アイゼンはひきとめた。

ゆっくりと振り返る彼女に、アイゼンは話があるんだといって手をとる。そして引っ張りこむようにして居間に入ってしまった二人を、侍女が頬を染めながら見送った。

「なんです…」

掴まれたままソファーに無理やり座らされたオルガは、こちらに目を向ける。

アイゼンはいそいそと自分の胸ポケットに手をいれると、小さな香水瓶を差し出してくる。

「これは？」

いきなり差し出されたそれに、オルガは困惑の声をあげる。

「君の実家の中庭に咲いていたラベンダーからとった香料だ。あまり量がなかったから、ほんの少ししかとれなかったがな」

アイゼンはオルガの手をとると、左手首の内側に瓶から一滴香料を落とすと刷りこんでくる。されるがままになっていたオルガは、アイゼンが手首を持ち上げて顔を近づけられた瞬間、ぱっと手を引っ込めようとしたが強い力で引き戻される。

「何もしない、においを確かめるだけだ」

「自分の、腕でしたらいいじゃないですか」

「これは、女性がつけるものだからな、男につけてもいまいち違うんだ」

そういうものなのか、と思わず納得してしまったオルガは、その

まま彼の息を手首の内側に感じながら、視線を落とす。

まつ毛が思いのほか長い、そしてまた色濃くのこっているクマ。

「ちゃんと……休みはとっていられたのですか――？」

目をふせたままにおいをかき続けるアイゼンは、オルガの言葉に静かに瞳をあげる。

ああ、見られている。

オルガは身体を微妙に後ろにやりながら、アイゼンの言葉をまつ。

「クマが、ひどい」

「これは、もう痕のようなものだ」

「……そうなのですか、――ラベンダーには身体を休ませる効果があるのでは？」

私につけるより、自分につけて嗅いでいたほうがいいのでは？

オルガがそういうと、アイゼンはひじ掛けに手をついて、こちらになにやら奇妙な笑みをむけてくる。手は未だにアイゼンの膝の上だ。

「君は、ずっと俺の傍にいたんだから、君がつけていたらそれでいい」

そう言い残すと、アイゼンはオルガの手を解放する。オルガはぱつと手を自分の胸の内にしまいこむと、アイゼンは更に笑みを深める。

気持ち悪い、そう思いながらアイゼンを見つめていると、アイゼンはひじ掛けに置いていた腕を持ち上げて、こちらに突然にじり寄ってくる。

「話がある」

「……はい」

突然の距離をつめられて、オルガは喉を鳴らす。

「君の母上の体調がどうもよくないらしい」

「……………はい」

「うわごとで君の名前を呼んでいた」

「そう…ですか」

オルガの言葉に、アイゼンの眉がピクリと動いた。

「そうですか、君の母親のことを言ってるんだぞ」

「ええ」

俯きがちになってしまったオルガに、アイゼンは迷いながらも言葉が続ける。

「何があつたかはわからない、が、あそこまで呼んでいるんだ」

「はい」

「一度家に戻って、母上に顔を見せるといい」

どういう親子関係を築いていたかわからないが、曖昧になった場所であれほど名前を呼んでいるのだ。愛しくないわけがない。

すれ違いはあつたのだろうが、垣間見えたうっとうしいほどの愛情を思い出し、何が理由かはわからないが沈んだ顔をしたイネスの肩をアイゼンはそっと抱き寄せた。

オルガはアイゼンに抱き寄せられた肩を抱きしめながら、一人ソファ―に座り続ける。

レイモンドと話があるといつて去ってしまったアイゼンを見送ることもできずに、ただ石のように座りづける。

母の、体調がよくない。

もともと身体の弱い人だったが、母親が夢うつつで呼んだイネスを思つて、オルガは一人目を閉じる。

身体は弱かったが、とてもキツイ人だった。泣くことよりは、怒りを見せることが多い人だった。そんな母上が、すっかり憔悴しきつてゐるだなんて――。

母上が、お腹を痛めて産んだこの世で立った一人の子供、イネス。イネスは、今この帝都のどこにいるのだろうか。

窓から街の明かりを見ながら、オルガは痛む胸に手をあてる。

では、あの時自分はもうしたらよかったのだろうか。産まれて初めて泣いている所をみたイネスの表情を思い出して、オルガは固く

目を閉じた。

母が望んでいる娘は、私ではない。

きつと帰っても、余計にあの人の体力を消耗させるだけだ。

先ほどのアイゼンの、かたくななこちらに言い含めるような言い方を思い出す。あの様子だと、私は近々家に一度戻らされるだろう。オルガはため息をつきながら、壁に寄り掛かる。

誰も、誰も悪い人間などいないのだ。

アイゼンは人として当たり前のことを言って、イネスは自分の諦めきれない夢の為に旅立った。そして愛する娘を失った母は病んだ。やること全てが裏目にでているような気がして、オルガは肩を掴む。

あの時は、イネスを逃がすことが最善だと思った。唯一の味方であつた彼女の為になればと、そう思った。

あの時の気持ちに偽りはない。しかし、今こうやって母親の不調を叩きつけられると、オルガは自分がひどい間違いを犯してしまったような気がしてうづく胸をおさえた。

母親のことを告げてから元氣のないイネスを見つめてから、アイゼンは静かに目を伏せる。

普通だったらすぐにでも帰りたいと、自分から申し出るだろうが、あれ以来イネスは母親について一切触れてこない。ただ、普段から少ない口数が少なくなり、何か思案にふけるようになった。

向かいのソファーに座りこんだまま、ぼんやりとティーカップの中に揺れる紅茶の水面を見つめているイネスを新聞を読むふりしながら見ると、イネスの頬が少しこけた気がした。

前ほど無理な減量はしていなかったらしいが、それでもやはり食べる量は少し前より減ったらしい。

すっかり元気を失ってしまった妻を見つめながら、アイゼンはこの前のラベンダーの香料のことを思う。他の香料を混ぜて、しっかりとした香水にするように命じたものは近々できるはずだ。

この世でたった一つの香水をプレゼントしたら、女性だったら喜ぶだろうが……いかんせん、我が妻だけはさっぱり読めない。

アイゼンは思わず貧乏ゆすりしそうになる足を抑えながら、この調子だと母上のようにこちらの娘まで参ってしまうのではないだろうか、と思うといてもたってもいられなくなって、黙り込むイネスの名前を呼ぶ。

新聞に夢中になっていると思われたアイゼンに、突然名前を呼ばれたイネスはのろのろと顔をあげる。

「君に、見せたいものがある」

イネスの家である図書室を見てから、すぐに思いついたことだった。

首をかしげるイネスの手をとってアイゼンは立ちあがると、屋敷の中を歩きはじめる。

一回の奥まった場所にある扉の前まで、イネスをエスコートすると、アイゼンはイネスに扉を開けるように指示する。

アイゼンの意図がわからないイネスは不思議な顔をしながらも、ドアに手をかけて促されるがままに扉を開けはなった。

「……………」

言葉は出なかった。ただ瞳を開いて、部屋の中を見つめるイネスの背をそっと押して部屋の中へと入れる。アイゼンはドアを閉めると、立ち止まったままのイネスを更に奥へと押し出す。

「どうした、声もでないのか」

黙りこんだままのイネスの肩を掴みながら、アイゼンは上からイネスを見下ろす。イネスは瞳をぐるぐるさせながら、圧倒されるようにこちらに背を預けてきた。

「君の家に帰った時、図書室を見させてもらった。それを、真似て作ってみたんだが…」

「信じられない…」

ようやくイネスの口から洩れたのはその言葉だった。

アイゼンはイネスの肩を掴みながら、言葉が続ける。

「別にこれぐらいなんともない。君には、こういう場所の方が落ち着くかなと思っただけだよ」

イネスは、後ろにあるアイゼンの手に自分の手を重ねてくる。そしてこちらを仰ぎ見る目には、本当に不思議そうな色が浮かんでいた。

「どうして？」

「どうしてって——、それを聞くのか」

あまりにも真っ直ぐな瞳で見られて、思わず視線をそらしかけたアイゼンがそう尋ねると、イネスは頷き返してくる。

アイゼンは、わざとらしく咳をしてから視線を合わせる。

「喜ぶと思ったからだ」

「わたしが、喜ぶと、あなたは嬉しいのですか？」

まだ聞くか、とアイゼンは思ったが、仕方ないのでとりあえず頷

いておく。

とたんに、イネスの瞳から溢れだした涙に、アイゼンはぎよつとしてイネスの肩を掴むと向かい合わせで覗き込む。下を向いて、顔を見せまいとするイネスの顎を優しく掴むと、空色の瞳から涙が次から次へとこぼれ落ちてくる。

どうすればいいかわからなくなったアイゼンは、とりあえず彼女の涙をぬぐうように目元に手を近付ける。反射的に目を閉じたイネスに、結婚式のことを思い出したアイゼンは、そのままあの時のように上体をかがめ、イネスの唇に自然と自分の唇を合わせていた。

瞳を閉じたままのイネスは、一度驚いたように目を開けたが、アイゼンの腕が後頭部に回ると静かに再び閉じられた。

受け入れてくれた、アイゼンの胸が高鳴った。

アイゼンは素直に口づけを受け入れてくれたイネスの、横髪を撫でながらそつと唇を放す。

「よかったのか？」

ほんの数センチで再び唇が触れそうな位置で問いかけると、イネスは潤んだ瞳でこちらをみてる

「わかりません」

結婚しているからです、そういつて返すかと思ったが、イネスの口からもれたのは「わからない」という一言だった。わからないと言って、さめざめと泣き続けるイネスを見て、初めてイネスの顔を見れたような、そんな気持ちになったアイゼンは泣きやまないイネスを抱き寄せる。

「泣くな。まるで、自分が悪いことをしたような気持ちになる」

アイゼンの胸に柔らかくおさまったイネスは、胸に額をつけたまままくぐもった声をもらす。

「すみ、ません」

ぐっと胸を掴まれて、アイゼンはイネスに愛おしさを覚えてさらに彼女の顔を再び持ち上げる。再び口づけようと、唇を近付ける。

「……………イネス…」

吐息混じりに名を呼ぶと、イネスがぼつと目を開く。

アイゼンはその瞳におびえを感じとったが、イネスはすぐに隠すように瞳を閉じてしまう。瞳を閉じたということは、きつと受け入れてくれたのだろう、そう思ったアイゼンは一瞬戸惑いながらも唇を重ねる。

先ほどは柔らかくこちらを受け入れてくれた唇だったが、二度目では固く閉ざされたままだった。かたくなさを感じたアイゼンは、少し落胆したが、口づけを嫌がる様子は見せないイネスを抱き寄せながら瞳を閉じる。

時間が、全てを解決させるだろう。少しづつ慣れて行けばいいのだ。

わかりあう時間はあまりあるほどあるのだから、触れることを許してくれた妻に感謝しながら、アイゼンはイネスの髪に顔を埋める。すると何もつけていないはずなの彼女からはあの中庭の匂いがした。

「イネス」

自室にイネスがいなかったので、たぶんここだろうと思いつながらノックをすると、中からイネスの柔らかい声が帰ってくる。

ドアを開けると、イネスは日当たりのいいソファアの上に座りながら静かに本のページをめくっていた。アイゼンは、一枚の絵のような彼女に近寄ると、そのまま隣に座りこむ。

「どうしました?」

「暇なんだ」

「そうなのですか」

こっちは暇じゃないのよ、と言わんばかりに瞳をそらしたイネスにむっとしたアイゼンは、イネスの本を奪い取る。

「子供みたいです」

「ああ、男はいつまでたっても子供なんだ」

開き直ったアイゼンに、イネスは諦めたようにため息をつく。そんなイネスに、アイゼンは頬笑みかけるとそのままイネスの手をとって、今日はどこかへ出かけようと誘ってきた。断っても結局はアイゼンノ言った通りになってしまうことを理解したイネスは、疲れたように頷きながら立ちあがる。

アイゼンに手を引っ張られて、よく若者が集うという場所に向かう。

最近流行りの洋服やがあるから今日はそこにいくぞ、と言うアイゼンに振り回されて少し疲れたオルガは外に席を設けられたカフェに座りながら痛くなった足の指先をドレスの下でぐりぐりと回す。

目の前に座るアイゼンは、こんな仏頂面の女を見て何が楽しいのだろうか、笑いながらこちらに目を向けてくる。

「楽しいですか？」

着せ替え人形のごとく、様々な服や靴を履かせられたことを思い出してオルガは三白眼でアイゼンを見つめる。

オルガの視線をアイゼンは軽く流しながら、あっさりと頷き返す。「ああ。大きい人形を手にいれたみたいでとても楽しい。姉や妹が人形遊びに夢中になってた理由をこの年でようやくわかった気がするよ」

そういつて紅茶に口をつけるアイゼンを見つめながら、オルガはふと疑問に思うことが出てきた。

「この年って———そういえば、何歳なのですか？」
結婚してから早数カ月。

ようやく新妻から自分の年齢を聞かれたアイゼンは、項垂れそうな頭を必死で起こしながら無理やりほほ笑む。興味を持ち始めたということだ、いい傾向だと思う。

すごいプラス思考なアイゼンは、そういつて自分を納得させた。

「何歳だと思う？」

オルガはめんどくさいという表情を隠さずに表にだす。

アイゼンも、どこの女のセリフだと思いつながらも、一度出してしまった言葉はもう戻せないので促すことしかできない。

「………30」

オルガが予想をいうと、アイゼンは明らかに不機嫌になった。

そうなるなら、はじめから聞かなければいいのに。そう思つたオルガに気がついているのか、いないのかアイゼンは苦虫をつぶした顔で口を開く。

「そこまでいつていない」

「じゃあ何歳なのですか」

「27」

「……別に変わらないじゃないですか」

オルガの言葉に、アイゼンは心外だといわんばかりにこちらに唾を吐きつけてくる。

「3歳違うんだ。大分違うぞ」

「そうですか」

「イネスが、俺ぐらいの年齢になったらわかる」

「あと、10年くらいですね」

楽しみですわ、そういつてオルガは紅茶をすすると、目の前のアイゼンが絶望したような顔でこちらを見てくる。

オルガはそれを見つめながら、運ばれてきたオレンジケーキに口をつける。

10年後、ね。

10年後も、こうして彼と一緒にいるのかしら。

10年というはかりしれない、自分が生きてきた時間の半分より長い時間を思っ、オルガはため息をついた。

オルガは屋敷に届いた大量のドレスを前にして目を丸くしていた。リリアとアネットが、オルガより先にドレスに飛びついた。

「まあまあ、このドレスは最近王宮にも呼ばれたというメリル女史の手によるものじゃなくって？」

どうしてドレスを見ただけでわかるのだろうか、素直に驚きながらオルガは手持無沙汰で二人の後ろに立っていることしかできない。「このレモン色のドレスとても可愛らしいですね。イネスさまの髪の色とよく合いそうですわ」

「このラベンダー色のドレスもきれいですわ。どれも淡い色で、繊細なレースがやわらかく映えますわね」

オルガが、開けてくれるよう頼むと、鼻息もあらく二人がドレスに飛びついた。

オルガはそれを見ながら、静かに紅茶を口に運ぶ。

「イネス様！こちらへ！」

ゆったりとしていたオルガは、アネットのするどい口調に思わずティーカップを落としそうになる、ガシャンと音をたてたオルガを気にすることなく、手を縦にふってこちらにくるように言ってくる。

オルガは、アネットの瞳が欄欄と光っていることに気がついた。

立ちあがって逃げようとしたオルガの手を、アネットの柔らかな手が掴む。

「お着替えしましょうね」

オルガはひっとひきつった声をあげたら、すぐに引っ張られて再び部屋へと押し戻された。

すっかりと着替えさせられたオルガは、ぐったりとしながら鏡の前に座らされている。

ノリにのった二人は、ただ今オルガの髪を巻いている。

「……まだ、ですか」

「イネス様！ 熱い思いをしたくないのなら、そのまま頭を動かさずにいてくださいね」

焼きごてをもったアネットがにこりと微笑む。オルガは横に傾きかけていた自分の頭を、さっと元の位置へと戻す。すると満足げにアネットがほほ笑んだので、オルガは乾いた笑いをもらった。

「イネス様、とてもお綺麗です」

リリアが興奮した様子で騒ぐと、アネットは得意げに鼻を鳴らした。

「ええ！ 素晴らしい出来ですわ」

リリアとアネットが両手を突き合わせて喜んでいる姿を生ぬるい瞳で見つめながら、オルガは鏡に映る自分を見つめる。

いつもよりきちんとされた口紅が白い肌に映えている。巻かれた髪はレモン色のドレスの上で揺れている。

「アイゼン様は今日いつ帰られるのですか？」

アネットがそうリリアに尋ねると、リリアは少し頬を染めながら「朝何もおっしゃっていませんでしたので、いつも通りかと」返す。

頬を染めたリリアに、アネットもつられて頬を染めるとほうつと息をつく。

「アイゼン様、きっと大喜びなさるわ——」

「きつと。いつもよりベットメイキングに力を入れますね！」

変な場所に力を込め始めたリリアを、アネットが「もう！」と言って叩いているが、その顔は満面の笑みだ。

不気味な二人に挟まれて、オルガは自分でもよくわからない内に笑っていた。

「お帰りなさい」

いつものようにアイゼンを迎えたオルガは、帰って来てからずっとアイゼンがこちらに視線を向けていることに気が付いていた。

視線は向けてくるのに、何も言っていないアイゼンに、まさかにあっていないのではないかと不安になったオルガは、急に自分が恥ずかしくなって下を向くと自室へと戻るために階段を駆け上った。

外套を執事に手渡したアイゼンは、逃げてしまったオルガの後をすぐに追って行ってしまう。夕食も食べずに逃亡してしまった二人の主役をみて、執事ははじめ目を丸くしたが新婚なのだからこういうこともあるだろう、と生ぬるく微笑むと静かに玄関を後にした。

突然叩かれたドアに、オルガはぱっとドアの方に目を向ける。

こちらの言葉も聞かずに開きそうになったドアの隙間に、オルガは叫ぶ。

「調子があまりよくなくて」

入ってこないでと言う想いでいったのだから、願いは虚しくドアは開かれた。静かに室内へ入ってきたアイゼンは、オルガが座っていたソファアーに同意も得ずに座りこむ。

「そんなに悪いのか」

「ええ…」

オルガが額に手をあてながらいうと、さすがに心配になったのかアイゼンが手を伸ばしてくる。拒否しようとしたが、無理やり額に手をあてられる。瞳を閉じたまま、なすがままになっていると、アイゼンの手が離れる。オルガはやっと離れた、と思った瞳を開いて驚いた。

「ど、うして……こんなに近いのですか？」

「……察しろ」

うろたえるオルガに対して、たった一言だけ返してきたアイゼンは更に顔を近づけてくる。

「いや、わからないですから」

「……口づけたい」

間近で瞳を見ながら囁かれて、オルガはぎよつとする。

くちづけ、口づけ、口をつける。つまり、接吻。

非常に回りくどい方法で、アイゼンが自分にたった今望んでいることを理解したオルガは首をぶんぶん横にふった。

「何故だ？ この前は許してくれたじゃないか」

「あっ、あれは」

「あれは、なんだ」

さらに顔を寄せてくるアイゼンから逃げようと、オルガはソファの上でひっくりかえってしまふ、やわらかいソファに身体を沈ませ、その衝撃に瞳をわずかばかりの間閉じていたら、次の瞬間真上にアイゼンの顔があった。

身体全体にのしかかるようにしてきたアイゼンに、オルガは口の中がカラカラに乾いて言葉も出ない。

動揺を隠しきれないオルガに、アイゼンは優しく頬見かけると、寝乱れた髪を撫でながら手櫛でなおし始める。顔の周りや首元を撫でられて、オルガはひっと息を飲みこむ。

「どうやら調子が悪いのは、本当らしいな……、顔が真っ赤だ」

真剣な顔で言っていたアイゼンの顔が、最後の一言で意地悪げな笑みになる。

わかっているんじゃない！そうオルガが叫ぼうとすると、黙ってろといわんばかりにアイゼンの唇が落ちてくる。

喋ろうとしたままで口づけられたので、自然と深い口づけになってしまった。

わずかな隙間から入ってこようとするアイゼンに、オルガは唇に力をいれて拒む。最初は閉じられていたアイゼンの瞳だったが、オ

ルガの必死の抵抗に薄眼を開けてこちらを窺ってくる。二人で目を見合わせたまま攻撃と防御を繰り返す二人だったが、ついに戦いに決着がつく。

戯れのようなやりとりを最初は楽しんでいたアイゼンだったのが、それがいつまでも続くとさすがに飽きたのか、それとも次に進みたいのか、ようやく手を伸ばしてくる。

伸ばされた手の先には、二つのふくらみがあった。アイゼンは、ちよつと戸惑いながらも、しかし最後にはしっかりと双丘の上に手を置く。

とたんに、オルガの身体から力が抜ける。アイゼンはそれを見計らって、自分の唇を更に深く重ね合わせる。苦しげな声をあげるオルガを宥めるように、そつと耳元をなでながら更に深く重ねて行く。慣れない、苦しげな様子に、年甲斐もなく興奮してしまったアイゼンは、オルガの力をなくしてしまった足の間に自分の足をからませる。そして更に深く口づけようと、唇を放した時によりやく異変に気がつく。

「……イネス？」

くてんと目を伏せたままの、オルガの頬に手をあててペチペチと叩くが、反応がかえってこない。すっかり意識を飛ばしてしまったオルガに、アイゼンは悩ましげなため息を漏らすとそのまま彼女の上から起きあがるのも忍びなくて、そのまま彼女を抱き寄せながら器用に身体を入れ替える。自分の胸の上で目のまわしたままのオルガを見つめながら、アイゼンはゆっくりとオルガの背中に手をまわしてしっかりと抱き寄せた。

目覚めたオルガは、自分がアイゼンの上に横たわっていることに気がついた。目を覚ましてから、あたりを見渡してからゆっくりと再びアイゼンに瞳を向ける。

下からこちらを見上げてくるアイゼンはじつとこちらを見ながら、オルガのフワフワに巻かれた髪の毛に手を伸ばしてくる。

「……………こういう、犬がいるな」

「……………プードル？」

「ああ、それだ。——それ」

アイゼンは頷きながら、更にオルガの髪を撫でる。まるで本当に犬になってしまったような気分で、ゆっくりと瞼を閉じて行くアイゼンを見つめる。

疲れているんだわ……そう思ったオルガは、アイゼンの上から立ちあがろうとするが、腰に薦のように回っているアイゼンの腕がそれを許さない。

眠りながらも、自分を抱きしめて放さないアイゼンにあきれながら、オルガはアイゼンの顔を覗き込む。いつも感じる思いのほか幼い寝顔に、オルガは自分が知らず知らずの内に微笑んでいることに気がつかなかった。

「なにか、いいことでもあったんですか？」

隣を歩くレイモンドがこちらに視線を向けてくる。からかうようなレイモンドに、アイゼンは舌打ちをする。

「あったとしても、お前にはいわない」

「アネットから、聞いちゃった」

レイモンドが隠しきれない笑みを手で隠しながら、こちらにいやらしい視線を向けてくる。レイモンドの言葉にアイゼンは驚愕した。まさか、そんなことまでアネットにしゃべっているのか、いや親しい友人ができたという点では喜ばしい限りだが、アネットに言えばこいつに筒抜けになるとは思わなかったのだろうか、アイゼンは難しい顔をしながらレイモンドを睨みつける。

「ひさびさの口づけ、どうだった？」

俺は毎朝アネットからしてもらってるもんねーというレイモンドの自慢を右から左に聞き流しながら（羨ましいわけではない、断じて違う）吐き捨てるようにしている。

「最高」

珍しく素直なアイゼンに、レイモンドは眼を見開いたが、数秒後には肩に手をまわしてくる。

「いやー、あてられんなー。どうだ？ 今夜一杯？」

「いらん。帰る」

「あてられますなー、いいもん、おれだってアネットといちゃつくもん」

そういつて口をふくらますレイモンドに、アイゼンは苦笑しながら、顎を掴みあげる。

「天下の往来だ。離れろ」

「ひっ、どう〜いつ」

顔を変形させながら、更に近寄ってこようとするレイモンドを押しつけながらアイゼンは足をさっさと進める。その後ろをすぐに追いかけて行くレイモンド、そんな二人を人ごみの中からハンチング帽をかぶった少年がずっと見つめていたことに気がつかずに、二人は慌しく去っていく。

ハンチング帽をかぶった少年は、ハンチングの下から海色の瞳を覗かせながらそっと呟いた。

「ラッド・アイゼン……。……オルガ」

唇から洩れた自分の片割れを思いながら歩いきはじめると、突然後ろからひかれるようにして腕を掴まれた。叫ぶより早く、口元を抑えられたので射殺しそうな視線で後ろから自分を抑えつける男に目を向ける。

子供や女を狙う人攫いかと思ったが、後ろを向くと黒い外套を着た背の高い男が両脇に男を従えて立っていた。人攫いとは思えない、それなりに上等な外套をきた男が、その見えない黒い瞳をこちらへ向けてくる。

「……………イネス様」

こちらを窺うような目で見つめてから、確信じみた様子でこちらに問いかけてきた男に、イネスはぐっと唇をかみしめる。

男は無遠慮に帽子をとると、短く切られた髪をみてため息をつく。

「……ご両親は、さぞ嘆かれるだろうな」

ぼそりと独り言のように呟いた男の言葉にイネスは、この男が自分を探すために両親がはなった追手だということを理解する。

「母親が心労で倒れたぞ」

男の腕の中から抜けようともがくが、腕を掴まれたただけなのにびくりともしない男の手に力が入る。痛みに顔をしかめていると、耳元でささやかれた言葉に、イネスは身体がから力が抜けるのを感じた。「妹を自分の身代りに送って、自分はのうのと夢を追うか——」大したお嬢様だよ」

すっかりおとなしくなってしまったイネスを、男は笑いながら馬車

に押し込んだ。

アイゼンが帰ってきたと同時に、オルガの腰に手を回す。

まだ周りに人がいるのに、そう思いながら図体のかい男を一人引きずって居間へと向かった。黙ったままソファ―に座ると、一緒にアイゼンも座りこむ。

「夕食は、どうしますか？」

「ここで食べる」

アイゼンの言葉に、後ろに控えていたリリスが頬を染めながら走り去っていく。

二人つきりになったとたんに、身体を更に近づけてくるアイゼンにオルガは叫び出したくなる。

一個許せば、どんどん付け込んできやがる。

心の中で口汚くののしりながら、近付いてきた唇を掌で防ぐ。

今日のアイゼンは少しお酒臭かった――。

「お酒を、飲んでこられたのですか？」

「レイモンドに誘われてな」

少し遅かった帰宅の理由はそれか。オルガは掌に吸いついてきたアイゼンを押しつけながら立ちあがる。

「あまり、触らないでください」

「……俺たちは夫婦なんだ、かまわないだろう」

「だからと言って……、節度というものがあります」

そう言われてしまったら、こちらも何も言えない。弱り顔で申し立ててきたオルガを、だらしなく両腕をソファ―の後ろに投げ出したアイゼンがうかがってくる。

「……二人つきりなら、何をしてもいいんだな」

「何をつて――」

オルガは眉をひそめると、アイゼンは更に言葉を続ける。

「だって、そういうことなんだろう。それに、俺たちは夫婦なんだ

からな！」

何が楽しいのか、その後一人で笑いだしたアイゼンが不気味に見えて、オルガは思わず身を後ろに引いた。

今日はどうやら、レイモンドと久々に二人っきりで飲んで楽しかったらしい。

結婚してからは毎日のように家に帰ってきた彼の、旧友（悪友ともいう）とのこれまでの交友に想いを馳せながら、オルガはだらしなく横たわったまま今にも寝てしまいそうなアイゼンに声をかける。

「夕食を食べるのでしょうか？」

寝てしまったらせっかく作ってくれたものが、台無しになってしまう。

もったいない、そう思ったオルガはアイゼンの肩を揺らした。

「うっ……」

がしりと掴まれた自分の手を見て、オルガは声にならない声をあげた。

アイゼンをみると、アイゼンはオルガの手首に口づけを今にも落とそうとしている。オルガが「止めてください」と悲鳴混じりに言うより早く、部屋のドアが開いた。

開いた所にリリアが立っていた。

いつも通り二人は食堂へむかっただと思っていたのか、特にノックもせずに現れたリリアは数秒こちらを見つめてから一気に爆発した。「あ、あつ、あのっ、わだし、しゅ、しゅみません！！！！」

回らない口で必死に謝りながら、立ち去ったリリアにオルガはどつと疲れて、その場で絨毯の上に座り込んでしまった。

それでもまだ手を放そうとしないアイゼンに、オルガはソファ一越しに「痛いから放して……」と哀願した。すると、数秒の間をおいてからようやく手が解放されたことに、オルガは更にため息をつく。

（すごく、疲れた――）

座りこんだままのオルガを、ソファの上からアイゼンが覗き込んでくる。酔っぱらって真っ赤に染まった顔を見ると、オルガは笑

うごとし
かできな
かった。

Call my name 20

「イネス！ ああ……っ」

寝台から身を乗り出しながらこちらに手を伸ばす母の姿に、イネスは胸が痛んで細くなった指先にそっと自分の指先をからめる。

からめたとたんに、ふっと微笑んだ母は、イネスの頭を掴んで覗き込んでくる。

「髪を、切ったのね…」

「邪魔でした、ので」

切った髪を売ったと言ったら母は泣くだろうか、イネスは母の言葉に頷き返しながら、黙ったまま体中を触り続ける母の腕をじっと受け入れる。

「その頬は——？」

赤くはれ上がった頬に、母の手が触れるとピリリとした痛みが走った。

「お父様に——」

イネスの言葉に、母は「かわいそうに」と言って、さらに抱きしめてくる。

「もう、何も言わないで、どこかに行ったりしないわよね」

やせ衰えた母の目が欄欄と光っている。イネスはそれを見つめながら、静かに頷く。

色々と言いたいことはあったが、今のこんな状態の母親の前で首を横に触れる娘がいるものか。ただ頷くだけにとどめた、娘に何か伝わるものがあったのか、母は更にイネスを抱き寄せる。

「ああ。本当に、ずっと心配していたのよ——」

Call my name 21

「イネス様……」

オルガは目の前でお辞儀をする人物を見つめた。

雨に濡れた使者は、父からのものだった。

執事から受け取ったタオルで、もうわからない程度に身体を拭きとると、光を何もうつさない黒い瞳をこちらに向けてくる。

結婚の前に、父に言われたことがある。

イネスのことが、何かわかったらすぐに知らせると。

男の鋭い視線を見つめながら、ついにその時が来たのかとオルガは胸を掴んだ。

「二人つきりに、して」

執事にそう告げると、執事はすぐに客間へと案内する。

オルガは椅子に座らずに、そっと窓際による。夜がもう更けてきて、暗い木々に大粒の雨がぶつかっているのを見ながら、そっと使者に言葉を促す。

「イネス様が、見つかりました」

使者は、雨音に消えてしまいうような声量で、ただ一言物申す。

オルガはその一言で全てを受け入れた。私の役目がついに終わったのだ。

オルガは安堵と同時に、少しの寂しさを感じた自分を叱咤しながら、使者を見つめる。

「いつ、そちらに戻ったらいいのですか？」

「すぐにでも——」

オルガは使者の言葉に、更に荒れだした空を見上げる。

「今日は、こちらに泊まっていくといいわ——。雷にでもあったりしたら大変ですもの」

オルガの言葉に、使者の男は頭を下げる。それは何に対してのものなのだろうか、オルガはそう思いながら、男の濡れた烏のような

髪をずっと見続けた。

帰ってきたアイゼンと夕食をとりながら、オルガは思う。

こうして彼と食事をするのは、これで最後になるだろうと。

「今度の休みに、舞台でも見に行かないか。アネットとレイモンドも一緒に」

この前ひどく酔って以来、禁酒の言葉を叫んだアイゼンは、水代わりに飲んでいたワインを炭酸水に変えていた。

アイゼンの誘いに、オルガは頷きながら自然と頬笑み返す。これが最後だと思えば、ほんの少し優しい気持ちになれるのは何故だろう。

食事を楽しんでから、二人で居間へと戻る。

オルガがソファアーに座ると、アイゼンも自然と隣に座る。

いつもだったら、食後の読書を始めるオルガだったが、今日は言わなければならなかったことがあった。

「今日、お父様から使者が来たの」

執事には口止めをしていたので、それを聞くのは今が初めてなはずだ。机の上においてある焼き菓子に手をつけようとしていた、アイゼンは初めて聞く言葉に顔をあげる。

「……お母様の、具合がよくないらしくて、一度戻って来てはくれないかということだったわ」

「そうか——」

アイゼンはそう言うと、そっとソファアーに身体を預ける。背もたれに沈みこんでしまったアイゼンは、こちらに視線を投げかけてくる。

「俺は行かなくていいか？」

「あなたにはお仕事があるでしょう」

心配げなアイゼンを窘めながら、オルガは思う。

あなたが来たら、うまくいくものもいかないじゃないと。

ついてきてくれと言ったら、来てくれるかしら。

バカバカしいことを考えている自分を笑いながら、オルガはアイゼンを見つめる。

「大丈夫。すぐに戻ってきますから——」

本当の、イネスが——。

オルガは声にならないように、そっと口元を動かしながら、膝の上に顔を乗せてきたアイゼンの髪を撫でる。

珍しく許してくれる様子のオルガが、以外に思ったのかアイゼンはそれ以上オルガに触れてこようとしなかった。

「イネス——」

「はい——」

「これを……」

黙ってなすがままに撫でられていたアイゼンは、突然立ち上がると引き出しの中から何かをとりだす。

目の前にいきなり差し出された、ピンクサーモンのレースのリボンがかけられた小箱にオルガは目を見張る。

「開けてみてくれ」

アイゼンの言葉に促されるようにして、小箱を受け取るとオルガはそっとレースのリボンをひく。少し不格好に結ばれた蝶々結びは一目でアイゼンの手によるものだと思った。

オルガはくすぐったい気持ちでそれを開くと、中におさめられていた香水瓶に目がいく。

キラキラとした、ダイヤをとかしこんだかのように光り輝くガラスのそれを、そっと壊さないように手に取る。

「……これは？」

「あの時の、香水が完成したんだ」

「えっ……？」

瓶を握り締めたまま戸惑うオルガの手を握りしめると、アイゼンは香水瓶をかすめとってしまう。アイゼンは蓋を開くと、その口の方をオルガの顔の前にもっていく。

オルガが瞳を閉じると、そこからは確かに自分家の中庭で毎年のように嗅いできたラベンダーと、そこにほんの少しアイゼンの香りが――。

「あなたの、おいがする」

オルガの言葉に、アイゼンはえっと驚いた化をした。じいっとみつめると、少しおどおどしながら白状する。

「ほんの少し、俺の使っている香水もブレンドしたんだ……、ほんの少し程度だからわからないと思ったが――」

「わかるわ、わかる。だって、この家にいて、あなたといると、いつもその香りがするのですもの」

オルガのその言葉に、アイゼンは苦しげに眉をひそめた。

自分にしては珍しく、素直な言葉を紡いだと思うのに、切なげに眉をひそめたアイゼンに、オルガは どうしたらいいかわからなくて、そっとその胸に手をあてる。

すると、自然と近寄ってくるアイゼンの顔に、オルガは自然と穏やかな気持ちで目を閉じた。これで最後なのだと思うと、すごく優しい気持ちになれた。

そして、唇が触れたとたんに逸る胸に、オルガは戸惑う。

胸が痛かった。先ほどのまでの優しい、彼に優しくしたいという気持ちではなく、ただ今はこの胸が痛む。優しく触れては、離れる、戸惑いがちな口づけを受けながら、オルガははらはらと泣きはじめる。

この人は、もう私のものではなくなる。

私に対する優しさも、この香水瓶も、全て、本当のイネスのものに。

オルガはそれが嫌ではなく、自然な当たり前のことだと思っているが、それでもあふれ出る涙を止めることができなかった。

自分がおかしいということとは重々わかっていたが、ついに涙腺まで壊れてしまったか、アイゼンの指 が涙の露を優しくはらうのを感じながら、オルガは静かに真摯に祈る。

彼が、幸せであるようにと――。

翌日、オルガは自分の生まれ育った屋敷に戻って来ていた。

ドアが開かれると、そこには父の姿があった。

アイゼンがくれたラベンター色のドレスを身につけながら、オルガはそれを優雅に広げながら頭をさげる。

父は、オルガの姿に、一つ頷くと、

「オルガ、これまで苦勞をかけたな——」
ねぎらってくれた。

オルガ父の優しい言葉に、涙がこぼれおちるのを止めることができずにはらはらと涙を流す。突然泣き出した娘に、父が動揺したのか、どうしたらいいかわからないと言った様子で、オルガを連れて帰ってきた男に瞳を向ける。

昨日から壊れてしまった涙腺を恥ずかしく思いながら、オルガは頭を横に振りながら「大丈夫ですっ」と言葉を詰まらせる。

オルガの言葉に、父はとりあえず頷くと、屋敷へ入るようにオルガを促す。

オルガはドアを一度振り返ると、閉じられるドアの向こうの景色を焼きつけるように、じっと見つめ続けた。

イネスがいる部屋には鍵がつけられていた。

父親が銀の鍵を回すのをオルガはじっと見つめる。父親に会ったとたん、罵倒されるかと思ったが何も言われずにむしろねぎらわれた。

イネスは、私が提案した今回の脱走劇の真実を誰にも告げていないらしい。

開かれたドアの向こうに促されて、オルガはフラフラと足を踏み入れる。

カーテンが閉められた暗い室内の中で、イネスは寝台の上に座りこんでいた。俯き加減でいたイネスは、開かれたドアに目を向けると同時にオルガの姿を見つけて目を見開く。

父はオルガを入れると、再びドアに鍵を閉め始めた。

オルガは閉められたドアを、ほんの少し見つめたが、すぐに振り切るようにしてイネスに近付く。

「……お姉さま——」

「オルガ——」

数カ月ぶりにあった姉妹は、お互いを固く抱きしめ会った。

「その髪は？」

「切った」

「……切ったんだ」

「ああ」

あっけらかんと言った姉に、脱力してしまい、オルガはイネスに抱きついたままズルズルと寝台の上に横になってしまう。

「どうして……？」

「街を歩いていたら見つかって連れ戻された。お前の所にも使者としていった奴がいただろう？ お父様は、どうやら優秀なものを雇ったらしいな……」

横たわりながらこうして寝ていると、あの日のことを思い出した。オルガが、イネスになり。イネスが逃げるように家を飛び出したあの日。

イネスもそうだったのか、軽く微笑んでいる。

「振り出しに、もどってしまったな」

「ええ、そうね」

何がおかしいのか、二人で少しの間笑い続ける。

そうして二人で気が済むまで笑い続けると、二人は顔を突き合わせ、小声でやりとりとをはじめめる。

「私が提案したことだって、言っていないのね」

「言っていないよ。提案したのは確かにお前だが、実行したのは私だからな」

まだ少し、腫れているイネスの頬に触れながら、オルガは「ごめんなさい」と謝る。イネスは首を横に振りながら、イネスの髪に触れる。

「気にするな——、と、いい香りだな。お前にしては珍しい。何か香水でもつけているのか？」

イネスのその言葉に、オルガは今朝この香水をつけた時のアイゼンの姿を思い出す。鼻の奥がツンとしたが、オルガは必死でそれを振り払う。

「ええ。あの人が、くれたの」

イネスは、小さなバツクの中からそれを取り出すと、それをイネスの手に握り締めさせる。

無理やり渡された香水瓶に、イネスは困惑を隠しきれずに香水瓶とオルガの顔を見つめつづける。

「これは、イネスに渡されたものだから——」

「でも、これを受け取ったのはオルガだろう？」

オルガは首を振ると、自分の髪から香りがただよって、今朝アイゼンが梳いてくれた髪に手を触れ、ぐっと握り締める。

父に先ほど言われたのだ、この数カ月のうちにあったことをイネスに全て教えるようにと。

オルガは震えそうになる声で、思いつきを語り始める。

「お姉さま、お父様には聞いたわね？」

「……………ああ」

「私が、お姉さまにあの人のことや、あちらで知り合った方の名前を教えるから——」

しっかりと覚えて下さいね。そう言おうとして、口を閉じた。姉はそんな余計なこと言わなくても、一度聞いたことは大抵覚えてしまうのだ。

「アイゼン様はね、口は悪いし、最初は怖い人だなんて思ったのだけれど——話してみたら案外楽しい方だったわ。欲しいものは何かってよく聞いてくるけど、答えられなかったら、答えられなかったで、あの人なりに考えたものを押しつけてくるから、それを素直に受け取っていたら満足すると思う。それに、あと、クマがひどいから、ちゃんと寝ているか確認してあげて。あと——時々すごいうざったいと思うかもしれないけど、基本こちらが嫌なことはしてこないから、断固とした態度で拒否したらいいと思う」

アイゼンのことを思い出しながらオルガは語り続ける。

「レイモンドっていう会社の人が出て、その人と仲がいいわ。……最近お酒で失敗して禁酒中だから、間違ってもお酒を勧めるようなことはしないでね。あと、最近一段と……スキンシップが激しくなってきた、けど——仕方ないから受け入れてあげて。さっきも言ったけど、本当に嫌がったら止めるから。後——頭のいい女性が好きだと言っていたから、その分はイネスだったら大丈夫だと思う。だからと言って突然博識になったらあっちも疑うと思うから——」語り続けていると、そっとイネスがオルガの肩を抱き寄せてくれる。

オルガは、アイゼンに抱き寄せられたことを思い出して肩を震わせる。

「それで——？」

優しく、促すようなイネスの言葉に頷きながらオルガは震える唇を開く。

「時々ね、子供っぽくて、意地悪なことをいつてきたりするけど、嫌いにならないであげて——」

イネスがそっとオルガの頬をぬぐう。

そこで、はじめてオルガは自分が泣いていることに気がついた。恥ずかしくなって俯くオルガを、イネスは抱き寄せる。

「……好きだった？」

イネスの言葉に、オルガはぱっと顔をあげる、信じられないとい

う顔をするオルガにイネスはほほ笑む。

「そんな、そんなことないわ——」

「なら、何故泣く？」

「それはっ——」

「会えないと思うとつらいのだろう、そんなに泣いて……」

痛ましげに眼を伏せるイネスに、オルガはイネスの胸に飛び込む。

「そんなことないわ、私は、別にあの人なんて」

「どうでもいい人間を思っ、普通泣くかね——？」

ふふっと意地悪げに笑う姉を、恨めしげに見上げながら声を震わせる。

「でも、だからって、どうしたらいいのよ——？」

そう言っ、泣き続けるオルガに、イネスは更にぎゅっと肩を掴む。

「ねえ、イネス。こんなことがまかり通ると思う？」

イネスの静かに、こちらに問いかける言葉にオルガは顔をあげる。
こんなこと、とは？

出来の悪い生徒であるオルガに、イネスは仕方ないなと頬笑みかける、オルガの頭をそっと撫でる。

「いいから、お前はここで少しまっていればいい。お前はこれまで頑張ってくれたのだから、後は私が頑張るよ——」

Call my name 23

イネスはオルガが持ってきたミントグリーンの服を着ながら、じつと馬車に揺られていた。

静かに瞳を閉じながら街道を一日中揺られていると、ついに馬車が音をたてて止まる。

馬車の外から騒がしい声がして、イネスは外に誰かいることに気がつく。

イネスは静かに、馬車から手を差し出すと、手をぐっと掴まれる。イネスはその強引な手に、ちよつとむつとしながらも振り払うことはせずに素直に、その手を掴みながら馬車を降りた。

「おかえりなさいませ。イネス様」

とたんに頭をさげる、ずらりとならんだ使用人たち。

イネスはそれを見ながら、そつと自分の手を掴む男と初めて目を合す。

「…………君は、誰だ？」

アイゼンの驚いた顔に、イネスはすぐに気がつくとは珍しいと思いながら、アイゼンの瞳をしっかりと見つめながら告げる。

「どうも初めまして、イネスと申します——」

イネスの言葉に、アイゼンは眉間にぐつと力を込めた。迫力のある顔に、この顔とクマを見ても優しい人だと言いきった我が妹を尊敬しながら、イネスは言葉を続ける。

「ごめんなさい。あなたのイネスではなくて」

困惑した様子で立ちつくしていたアイゼンだったが、ようやく頭が動きだしたみたいで顔をあげるとこちらに詰め寄ってくる。

「イネスはどこだ！」

「イネスは私です。落ちついてください。全てを説明しますので」
近寄ってきたアイゼンをなだめながら、イネスは隣に立つ執事を

見る。

「疲れたのでまずは休ませてくれないかしら？ 一日中馬車に揺られてお尻が痛いの」

そう言うと、アイゼンより先に屋敷の中に入り込んでしまったイネス。

一人残されたアイゼンは、頭を抱えながらしゃがみ込み――

「……イネ……ス？」

愛しい妻の名前を呼んだ。

「では、君がイネスで、あのイネスは――」

「私の妹です」

同じ顔だというのにここまで印象が変わるものだろうか、目の前で足を組みながら言葉を繰り返すイネスを見ながらアイゼンは目をごすった。

見た目はそっくりだが、感じる印象は真逆だ。

あのイネスはぼうっとしていたが、ここまでキツイ印象はなかった。

「妹――？ 聞いたことがないぞ」

確かに、あそこの夫婦の間に産まれた娘はイネス一人だったはずだ。突然出された妹という単語に、アイゼンは眉をひそめる。

「あの父と母の間に産まれたのは私一人。あの子は――父が他の女性との間にもうけた娘なの」

「……そうなのか」

「ええ。あの子は、ずっと屋敷から出ることを許されなかった。：

……母が、それを許さなかった」

アイゼンはぎゅっと掌を握った。

イネスが、あの子が言っていた言葉が脳裏をよぎる。図書館にいた、あの暗い図書館に。あそこしか居場所はなかったのが、あの薄

暗い図書館に座りこむ姿がすぐに頭に浮かんで、アイゼンは瞳を閉じる。

「そういう…こと、だったのか」

「――こちらが、あなたをだましたのは事実だわ」

「ああ」

イネスは神妙な顔で両手をぎゅっと重ねる、そして藍色の瞳で哀願してくる。

「でも、あの子の気持ちは疑わないで、お願いだから。着てきたドレスも、持ってきた荷物も全て私に差し出してきたけど、あなたが送った香水の瓶だけは絶対に手放さなかった。すごく、大事そうに握り締めていた」

後半になってブルブルと震えだしたイネスの声に、アイゼンは何も言わずに立ち上がる。無言なまま立ちあがったので、そのまま立ち去られるのだと思われたのだろうか、イネスが立ちあがって追いつがってくる。

アイゼンは追ってくるイネスを後ろに、そのままドアを開けるとすぐ横に立っていたレイモンドに声をかける。

「今日と明日の俺の仕事は無し、な」

突然の宣言に、レイモンドは真面目な顔で頷くと、目の前を颯爽と早足で通り抜けて行くアイゼンとイネスを静かに見送った。

オルガは自室で立ちつくしていた。

立ったままずっと外を見つめる。窓に触れたとたんに、ひんやりとした底冷えするような冷たさが襲ってくる。オルガはじっと氷のように冷たい窓に触れながら、深い森を見つめる。

帝都はどちらだろう。イネスが、あの人たちが、あの人がいる場所——。

方向感覚がわからないイネスは、ぼっかりと穴のように浮かんだ月を見上げる。今夜は月の光が強すぎて、星の光があまり見えない。暗い夜空にひとりぼっちで浮かぶ月を見ながら、オルガは胸をおさえる。

たびたび、外を見つめる自分を、彼はいつも不思議そうに見ていた。

オルガは違うくなってしまった外の景色を見てから、自分の真正面を見つめる。

あの人がない、私はイネスではない、だから——。

オルガは溢れるものを止めることができずに、ぎゅっと香水の瓶を抱きしめる。まるでこの瓶に、彼の温もりが残っているのではないかと思うほど必死に。

二度と、二度と会うことはないだろう。

彼があつたらイネスが二人もいることになる。それに突然現れた妹というのも体裁が悪い。それに、なによりオルガがアイゼンにあつて冷静でいられる自信がないのだ。

姉に言われたことを思い出す。

これは、あれは恋だったのか。私は、彼が愛おしかったのかと。胸が苦しいとオルガは囁く、誰も聞いていないとわかつていなが

らも、吐き出さずにいられなかった。それほどに胸がつまるように、苦しかった。

このままでは生きていけないのではないか、身体は健康なはずなのに、アイゼンから離れもう二度と会えないのかと思うと、ただただ胸が痛い。

オルガは胸を抑えながら、溢れだしてきた涙を止めることができずにそのまま窓の傍にしゃがみ込んでしまう。

口を開けば、嗚咽と言っではいけない言葉があふれ出してきてしまう。

「アイゼン……………」

オルガに戻って、はじめて彼の名前を呼んだ。

いつもはイネスで、いつもと言っても本当に時折だったが。

オルガは、ぽろぽろと涙をこぼしながら更に口を開く。

「…………アイゼン——っ」

声にもならず、唇だけで象りながらオルガは目元を歪め声が誰にも聞こえないようひそめながら囁き続けた。

ガラガラと尻の下で車輪が回る。

時折正面に座るイネスが宙に浮かぶのが目に入ったが、スピードを落としてはしなかった。

頭を馬車の天井にぶつけそうになるほど飛び上がるイネスの髪の毛が、ずるりと前にズレ落ちたのには驚いたが、すぐ下から現れた短くなった髪をみて「ああっ」となった。

イネスはズレ落ちた髪を、無造作に脇に放り出すと再び揺れる馬車に眉をしかめはするが、文句は言っていない。一刻も早く家に着きたい気持ちは一緒らしい。

黙り込んだままのイネスに話しかけることもせず、アイゼンはすっかり真っ暗になってしまった外を見つめる。

自分が望んだ本当の妻を前にして、残念ながらアイゼンはなんとも思っていないかった。結婚式をあげたのも、一緒にあの屋敷でくらしただけ、すべてすべて――。

アイゼンは暗闇の向こうをじっと見つめながら、彼女が暗闇の中で泣きじゃくっているような気がした。そんな自分の都合のいい妄想だということはわかってはいるが、それでも脳裏で涙を流す彼女の姿に胸が痛むし、一刻も早く抱きしめて、こぼれおちる涙をぬぐいたいと思うってしまう。

胸の中の彼女を抱きしめることができないから、本物の彼女を抱きしめるのだ。

アイゼンは耐えきれずに、窓を開けると馬車を走らせる男に叫ぶ。

「もっとだ！ もっと急いでくれ！」

「…これ以上飛ばすと、車輪が――」

「一刻も早くつきたんだ！！」

「……はあ——」

困惑した様子で頷く男に、アイゼンのはあつとため息をつく。無理は承知だ、それでも——。顔を引っ込めたアイゼンの代わりに、黙っていたイネスが顔をだして前に声をかける。

「愛の為よ」

アイゼンほど声をはったわけではないが、妙に響いたその言葉にアイゼンは黙り込む。

少ししてから馬をせかすための鞭が、高らかに音をたてて闇夜に響いた。

「お父様は」

執事かドアを開けるより早く、扉を開いたイネスに、執事は珍しく目を驚きに見開いた。そしてすぐ後ろに続いて現れたアイゼンの姿に、困惑した様子で視線を向ける。

「旦那さまは、すでに眠っておられます——」

「でしょうね」

真夜中を過ぎたところに現れた二人の無礼な客人に、執事は眉をひそめるが何も言っではこない。今朝でいったばかりのお嬢様が、アイゼンを引き連れて非常識な時間に突然現れた理由がわかっていくからだろう。

「イネス様——」

イネスを心配するような、怒るような声音で囁いた執事に、イネスはそっと目を伏せながら囁く。

「親不孝なことばかりしているというのはわかる。けど、それでもこれだけは許せなかったの」

イネスの言葉に、執事は小さく首を縦に振ると、後ろにずっと立っただまのアイゼンに声をかける。

「もう、寝ていると思います——」

「いいから連れて行って」

アイゼンが口を開くより先に、イネスが口を開く。

アイゼンに執事のほうについていくように促してから、突然の訪問者によって屋敷がざわめくを感じてイネスは自らの足で父と母の部屋へと歩き出した。

こんこん、と小さな、しかし少し乱暴にドアを叩かれる。

ベッドに上体を伏せたまま、ちよつと眠ってしまっていたオルガは何回も続くその音に、眠りから目覚めるとそつと顔をあげる。

朝はまだ早い。こんな真夜中に、いったい何があったのだろうか――。

オルガは泣き疲れてぼんやりとした頭で、ドアの近くへよる。するとしびれを切らしたのか、再びドアが音をたてる。その大きな音に、オルガは眉をひそめながらそつとドアを開く。

「……………」

そして閉めた。

暗闇の中に、眼の下にクマが濃い男が立っていて見下ろされた、気がする。

こんこんこん、今まで一番強くドアを叩かれる、どうしたらいいかわからなくて黙ったままドアノブを掴んだままのオルガの掌に、ドアの向こうでドアノブを掴まれた感触が伝わってきた。

オルガはぎゅつと掌に力を込めてみるが、その抵抗は空しくドアノブがゆっくりと回り始める。

ドアが再び開かれた。オルガは開け放たれたドアの向こうに立っている男の顔をみて、自分がなにやら都合のいい夢をみているのだと思った。

そつと、前に立ったままの男に手を伸ばす。伸ばした手は、彼の胸元に当たった。

固いそれを確かめるようにオルガは、ポンポンと叩き続ける。

「……………どうして帰ってこなかった」

腹の底から響いてくるような声音に、オルガは肩をすくめる。すっかり小さくなってしまったオルガに、アイゼンは手を伸ばしてく

る。

アイゼンの指が自分に届くより早く、オルガは叫んでいた。

「どうしてっ、ここへ来たのですかっ？」

くしゃりと顔を歪ませたオルガに、アイゼンは目を細める。

「じゃあ聞く。お前はここへ来てほしくはなかったのか？」

「……お姉さまは——？」

迷い子のように幼い様子で姉を呼ぶオルガにアイゼンは眉をよせる。

「父上と母上のところへ向かった」

ぐっと両手を握りしめてしめたまま立ちすくむオルガに、アイゼンは手を差し出して再び問いかけてくる。

「もう一度聞く。どうして、帰ってこなかった？」

アイゼンの、一つ一つくぎってゆっくりと問いかける声に、オルガは瞳をぎゅっと閉じる。灰色のドレスの下足の足がガクガクと揺れる。

下を向いたオルガの瞳に、自分の着ている色気のない修道女がきるように質素なドレスが目に入る。この姿が自分の本当の姿なのだ。アイゼンがくれた、淡い色をしたドレスもキラキラと輝く香水の瓶も、自分には何一つ相応しくない。汚らわしい、いらぬ、と言ってずっと家に閉じ込められていた私には、彼は相応しくない——。アイゼンの優しい声に、オルガは首を横に振る。

相応しくないのは重々承知だ。灰かぶりの私に、都会の王子様は似合わない。ここか、どこかの修道院で過ごすのが、私の未来。

彼の隣に私の姿は、ない——。

オルガは目の前で手を差し出すアイゼンを見つめる。アイゼンが見つめているのは、この、私だ。

胸が痛いほどに、強い、激しい瞳でこちらを見てくる。オルガはアイゼンの視線に身体が炙れるような熱を感じた。

「迎えに、来てほしくなかったか……？」

そんな、わけがない。

オルガは目元が熱くなるのを感じながら、ぎゅっと胸元で手を重ねる。

望んでも、願ってもいいのだろうか。

たった一度の、最大の我儘を、言ってもしまってもいいのだろうか。

差し出された手とアイゼンの顔を交互に歪む瞳で見つめながら、オルガはおそろおそると言った様子で胸元の手を解く。

手をこちらに向けたまま、それ以上動けないでいるオルガをアイゼンは見つめながら言葉を続ける。

「お前が願え。お前の願いだったら俺はなんだってかなえてやるから」

アイゼンの真剣な瞳を見つめながら、オルガはそっとアイゼンの指先に触れる。

指先を触れ合わせたまま、オルガは喉をこくりと鳴らす。

アイゼンはオルガの指先と自分の指先をそっとからませる。オルガはぐっと握りこまれた指先に、「あっ」と声をあげると、そのままアイゼンの腕の中にひかれるようにして自らの意思で飛び込んで行った。

「どうして……っ」

目の前で寝間着姿の母が唇をわなわなと震わせる。

イネスは母の責めるような瞳を静かに見つめ返しながら口をゆっくりと開いた。

「見破られてしまったの。だから、帰ってきました」

しっかりと屋敷まで送り届けたという報告を受け取っていたのに、まさか行ってその日のうちに戻ってくるとは思ってもいなかっただろう。夜中の突然の娘の訪問に、アウラは疲れたと言わんばかりに目元に手をあてる。

小刻みに震えはじめたアウラに気がついたリーグが、そっとその肩に手を伸ばしかけたが、すぐにその手はアウラによって振り払われる。

胸を抑えたまま、苦しげな息を繰り返しながらアウラは首を横にふる。折り曲げた上体は苦しげにゆれていて、アウラは乱れほつれた前髪の隙間から、自分の夫であるリーグを激しく睨みつけた。

深い海色の瞳を潤ませながら睨みつける。

そうして、しばらく凍りついたように動かない空気だったが、アウラが苦しげに肩を震わせながらその場に崩れ落ちたことで一気に動き出した。

イネスは、その場に崩れ落ちるようにしてしゃがみ込んでしまったアウラにそっと手を伸ばす。そして宥めるように、背を撫でながら共にソファァーに座りこむ。

「……お母様、ごめんなさい」

激しい、怒りにか、悲しみにか、涙を流し感情を露わにする母に、イネスは戸惑いながら話しかける。

イネスの謝罪に、アウラは引き攣るように息を吸い込む。

「私は、あなたの為を思って、あの人があなただけを望まれて、ああい

う最近の方だったら、あなたの素晴らしさを、ちゃんと理解できる
と」

賢さゆえにうとまれ続けたイネスを思っただけの行動だったと、アウ
ラは震える言葉を続ける。

「あなたが、幸せになれると思ったのよ。ちゃんと望まれて、結婚
して……。私とっ……。私みたいにはなってほしくないと……」

俯きながら更に泣きだすアウラの、すっかり細くなってしまった
肩に手を回しながらイネスは瞳を閉じる。

父には、母の他に好きな女がいたのだ。

若かった父は、愛する女を家で雇いながら――母と結婚した。
身分さゆえに結婚できなかったのだと、そう聞いた。

若い、何も知らない娘だった母は不安と期待でせめぎ合う胸を、白
魚のような美しい手で抑えながらここに嫁いできたのだろう。

そして、この森の奥深くの古い洋館で――父と女と出会った。

ずっと一緒にいて気がつかないわけがない。時折かわされる二人の
密やかだが、饒舌に愛をかわしあう熱い瞳を母はずっと見ていた。

そして、それを見続け、それでも嫁いできたばかりだといって、何
も言えなかった可哀そうな母は私を身ごもったのだ。

父の子を腹に宿した母は、身重な、それに跡継ぎを産む正式な妻で
ある母の元へ夫がやってくると思ったのだろう。

使用人風情に熱をあげていた父も、子が出来たという責任感ゆえに、
しっかりとこちらの存在を受け入れて、こちらに愛を注いでくれる
と。

しかし、それは違ったのだ。

オルガの存在、それ自体が父の不貞の証であった。

オルガの母親は、オルガを産んですぐに産後の肥立ちが悪くて死ん
だらしい。死んだ女が産んだ娘を、父は家へと入れようとしたが、
母がそれを激しく拒絶したのだ。

男ではなく、同じく娘を産んだ母は、あちらが産んだ娘に子供の座
さえも奪われてしまうのかと父を詰った。

弱い男だった父は、オルガを可哀そうだと思いながらも、激しく泣き叫びこちらを叱咤する母の勢いと母の腕の中で眠る産まれたての私を見て、オルガを正式に迎え入れることを諦めた。

こうしてオルガは隠された子として、この屋敷で育てあげられた。日に日に、双子のように似ていく二人を見ながら、母は胸を痛めた。オルガの瞳だけが、どうしてあの女と似てしまったのかと、死んだ女と同じ瞳をし、自分の愛する娘とそっくりな容姿をもったオルガの存在に、母はバランスを崩した。

この子も私が産みたかったと、そういつて父を詰る母をイネスは幼い時に見たことがある。

泣き叫ぶ母の背をなだめながら、じっと立ちつくすことしか出来ない父をイネスは見つめる。

イネスの、母親譲りの瞳をリーグは静かに見つめ返す。

「お父様。オルガは、アイゼン殿と互いに想いあっていました。……だから、いいでしょう？」

泣きわめく母を抱きしめながら、イネスは静かに父に問うと、イネスの言葉に父は小さく「そうだな」と言って頷いた。

母への罪悪感ゆえに、娘を取り換えてしまうことに関して何も口出しすることができなかった父が、妻そっくりの瞳で自分を見つめる娘を前にして瞳を揺らす。

母が、身体を壊すほど願った娘の幸せな結婚。

自分とは違い幸せになってもraitたいと、そう願う妻をみて、父はどんな想いだっただろうか。イネスとオルガを取り換えることに關して、うまくいくと、そう思い込んでしまうほどに未だに心を痛め続けている妻に、彼女の気が済むまでも思ったのだろうか。

イネスは、自分が家に戻ってきた夜のことを思い出す。

ベッドの上に横たわった母の背を支えながら、喜びに涙を流す母の背をそっと宥めるように撫でながら見つめる父の瞳には、憐れみだけではない、確かに母を氣遣う色が見えた。

あれは、愛とは言えないのだろうか――。

若さゆえに燃え上がり、周りを傷つけても構わない。それでも欲しいと願うほどの情熱ではないが、それでも確かに一緒に過ごし、積み重ねてきたものがそこには確かにあった。

イネスは未だに若い頃の痛みを背負ったままの母を抱きしめながら瞳を閉じた。

いびつな、家族だった。

父と母と娘と――娘。

母に対する罪悪感で何も言えない父に、義理の娘を愛せない母。

そんな両親とかわいそうな妹を見ながら何もせずに育ってきた私に、その出生ゆえにずっと閉じ込められ続けたオルガ。

イネスは父と母を見つめながら、そっと目を伏せる。

今からでも、ほんの少しでも、何か変わることができないかと。

自分のしたいことをする前に、することができてしまったとイネスは僅かに頬笑みながら、母の肩に頭をのせる。

「お母様。イネスは幸せです。ちゃんと、幸せになりますから――」
涙をはらはらと流す母の肩を抱きしめながら、イネスは父を再び見上げる。

そして、声には出さずに唇を動かす。

愛してる
と。

オルガとアイゼンは寄り添うように廊下を歩いて玄関まで向かうとすると、目の前に父が現れた。父の姿をみて、おびえたように身体を震わせるオルガを支えるようにアイゼンは肩を掴む。

「夜分遅くにすみませんでした——」

アイゼンの謝罪にリーグは疲れたように首を横に振る。

「その子を、連れていくのか」

「彼女が、私の妻ですから」

「そうか——」

父は静かに呟くと、オルガに視線を向ける。おびえるオルガに目を細めると、そのまま静かに頭をさげる。

「……娘を、頼みます」

父の小さな言葉に、アイゼンは静かにだが確かに頷き返すと、呆然としたままのオルガの肩を掴んでそのまま父の脇を通り過ぎて言ってしまう。

オルガはアイゼンに肩を掴まれながら、必死で後ろに顔を向けると父はまだ頭を下けたままだった。だれも前に立っていない廊下で頭を下げ続ける父の姿を、オルガは見えなくなるまで見つめ続けた。

馬車に乗り込んだオルガとアイゼンの前にイネスが姿を見せた。

馬車の窓から顔をだすオルガに、イネスはそつと手を伸ばす。

「幸せに、なるのよ」

イネスの言葉に、オルガは小さく頷く。

「お姉さまは———?」

「私は、この家ですることができた。親不孝なことばかりしてしまっただけで、少しでも傍にいて——そして、いつか勉強することを許してもらいたいと思っている」

イネスの言葉に、オルガは涙をこぼしながら頷き続ける。泣きつづけるオルガに、イネスは困ったように微笑むとアイゼンに瞳を向

ける。

「私の妹を頼んだ。あつ、あと当家への援助も、な」

ちゃっかりとしたイネスに、アイゼンは口元を微妙に歪めさせながら鷹揚に頷く。

そうして動き始めた馬車から、オルガは身を乗り出しながら手をふる。

母に――母の姿をみることは出来なかった。

生まれてすぐにここへやってきたオルガにとって、確かにあの人が母親だったのだ。

声も姿も覚えていない生母と違い、アウラは常に屋敷にいた。話しかけられずとも、物心ついたころからずっとオルガの傍にいたのだ。

イネスに向ける優しい瞳や、声がずっと羨ましかった。背を向けているがゆえに、気がつかずに間違えて私に優しい声をかけられた時は飛び上がるほど嬉しかった。

……たとえ、後に振り返った瞬間その笑顔が消えうせることになるうと。

一度だけ、風邪を引いてしまった時に、母が傍についていてくれたことがある。幼い、自分の娘そっくりな私の苦しむ姿に情が動かされたのだろうか。あの時母は声をかけずとも、私の額からこぼれ落ちる汗を自分のハンカチでぬぐってくれた。苦しいと言うと、そっけないくはあったが「もう少しで医者がかかります」と励ましてくれた。オルガの伸ばした小さい手に、困惑しつつも手を重ねてくれた。オルガにとって、あの時間は宝物だった――。

手ひどく扱われるたびに辛く、恨んではないかと問われると困るが、恨みよりは痛みの方が強かった。愛されたいと、あの人の笑顔が、こちらに微笑んで欲しいと――、そう思う時間の方が多かったのだ。

涙ににじむ瞳で必死に自分の片割れに手を振る。

イネスに微笑む母の優しい笑顔がずっと欲しかった。ずっと、ず

つと——。

オルガは涙をこぼしながら願う。

どうか、幸せになってもらいたいと。

そして、いつか、どれほど時間がかかってでもいいからあの笑顔を私にも向けてくれたらと。

涙をこぼし続けるオルガの肩を揺れる馬車の中で宥めるようにアイゼンが触れていると、腕の中のオルガが顔をあげた。

「お願いが、、あります」

「なんだ？」

「私を、必要と言ってください……」

オルガの言葉に、アイゼンは確かに頷く。オルガはアイゼンが頷いてくれたのをしっかりと確認してから、もう一つ願いを口にする。

「……名前を、呼んで下さい——」

私の震える声に、アイゼンはこちらを覗き込んでくる。

「……オルガ」

あとほんの数センチで唇が触れ合いそうな距離で、アイゼンは名前を呼んだ。

オルガ、と。

はじめて呼ばれた自分の名前に、オルガははじめてこの世に生まれ出たような、そんな想いでアイゼンを見つめる。オルガの瞳から溢れだして止まることを知らない涙を、アイゼンの唇が優しくぬぐう。

人肌だけではない暖かさに、確かに私はこの男に愛されていると、いうことを確信して、オルガはようやくよく理解できた。

なんと、彼が愛おしいことか。

オルガは産まれたての赤子のように涙を流しながら、やっとの想いでなんとか微笑む。

「アイゼン――」

そうして彼の名前を、本当の自分になってようやく囁くのだった。

E
N
D

Call my name 28 (後書き)

『Call my name』いかがだったでしょうか？

更新している内に、タイトルが安直すぎたかしら……と想ったりもしたんですが笑

とりあえず、これで終わりです。

ずっといいものとして扱われていた、唯一自分を呼んでくれたイネスの為に行動を起こしたオルガ。

最後の方で、恨んでいないかといったら否と書きましたが、イネスの身代わりになると決めた時、イネスの為だという想いの奥底には、家族に対する怒りもあったかもしれません。

だけど、あまり人と付き合うことのなかったオルガは、それが憎しみだということにも気がつかずに、モヤモヤとした気持ちを抱いたまま、アイゼンの元へと向かいました。

アイゼンはアイゼンで、おもしろいと思って望んだ女が自分の想像とは違ったので最初は困惑しましたが、素直なオルガに触れる内にこれもこれで面白いかも……とか思っちゃいました笑

よく知らんうちに結婚を決めて、強引に承諾を得る。。。アイゼンのその行動力が怖い。まじ本能のままやで……。欲しいものは欲しい、だから手に入れる！ その考えが、商売成功の原動力となっているのか――？

アイゼンの強引なまでに、イネスを求める様子は、アウラがそういう風に求めてもらいたかったという長年のくすぶりに火をつけたのかもしれない。

ないものとして扱われてきたオルガは、アイゼンと過ごし「イネス」と呼ばれるうちに、それは自分ではないという想いに駆られる。アイゼンはアイゼンで、打ち解けたのかと思うたびに拒絶されて、そ

の時に相手の瞳に浮かぶ怯えのようなものを意識して、怒るにも怒れないで心配になってしまう。

何も求めない妻に対して、自分で思いつく限りの喜ぶことをしまくったアイゼンの健気な様子笑に悶えてくれたでしょうか？　オルガが素直に喜んでくれると、嬉しさのあまり暴走しちゃうあたりが可愛いなと思いますながら書いていました。

だから最後に、オルガが自分から望みを言ってきた時はすごく嬉しかったと思います。そしてその内容が「自分を必要として欲しい。名を呼んでほしい」というものだったのを聞いた瞬間、それまでの物をねだるものたちとは違う、当たり前のことを切実に願うオルガの姿に、絶対オルガを幸せにしなければという想いでメラメラと燃えたと思います。

あとがきって、何をかけばいいの？　と思いつつ今この文章を打ってます。

オルガのことを可愛いと言っていただけで、とてもうれしかったです。

オルガは幸せです。幸せになりました。

その後

オルガとアイゼンの間には、アイゼンがオルガを連れ帰って一年後に子供が産まれる。

アネット&レイモンド夫妻より早くに子宝に恵まれた二人（主にアイゼン）は、周囲から（二人の間で起きた出来事を知る者）生ぬるい目で見られることになる笑

アイゼンは子供が出来たと報告した時の、レイモンドとアネットの苦笑する様子と、イネスの明らかに気分が悪いといわんばかりの態度に傷ついたといって、オルガに泣きついたとか、泣きつかなかったとか笑

二人して帰ってきてから、アイゼンだけでなくオルガにもクマができたそうだが、幸せそうに微笑んでいるので周りは何も言えなかったとか、、笑

イネスはその後、両親の関係を修復しつつ、自分の夢を認めてもらうことで帝都で勉強することを許される。オルガと一緒に住みましようと言われるが、隣に座るアイゼンが明らかに嫌な顔をしたし、妹夫妻のラブラブな様子も目に毒だと一人暮らしを始める。初めてできた姪は、すごくかわいいらしくしょっちゅう二人の家へと遊びに行く。父と母が隠れてつけた護衛の存在に気がついて、イライラする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8367w/>

Call my name

2011年10月5日03時12分発行